

令和5年度

研究 ゆり

研究主題

児童生徒が学びをつなぐ教育課程の編成



## 巻 頭 言

本校では「『児童生徒が学びをつなぐ』教育課程の編成」をテーマに、2年間研究として取り組んで参りました。研究は一般的に教師目線のねらい、つまり「我々が何を實現したいのか」「我々が何を指すか」を掲げたテーマが多いように思います。しかし、私たちはテーマを、あえて児童生徒「を」でも「の」でもなく、「が」としたことで、子どもが主体的に学んでいく姿、言わば目指す山の頂上がよりイメージしやすくなりました。そして児童生徒自身が、学びを広げたり深めたりしながら、その楽しさやつながりを実感し、次の学びへの意欲が高まる、「児童生徒自身が何を学び、何が身についたか」を意識した実践を重ねてきました。

1年目の昨年度は、音楽科、職業・家庭科、保健体育科の学部の枠を超えた教科ワーキンググループを作り、授業づくりや協議を通して授業改善や指導計画の見直しを行いました。

通常2年連続で同様の手法でテーマに取り組むのが普通ですが、今年は発展的に方法を変えることにしました。昨年度に教科ワーキンググループで得た知見は、年間指導計画の様式に学習指導要領とのつながりを明らかにし、指導の系統性や教科横断的な視点を取り入れる等様式を工夫することに生かし改善しました。また他学部の職員を授業で活用する場面を設定するなど、日常の実践に反映することとしました。

今年度は視点を変え新たなアプローチで、本校のキャリア・パスポート「未来へのスケッチ」の活用を軸にテーマに迫っていくこととしました。この「未来へのスケッチ」は、一人一人の「こんなふうになりたい」という願いを明確化し、学ぶ喜びを味わい、学びの足跡が見えることで自己理解を深めるツールです。また学校や家庭、社会をつなぐ共通言語としての活用も期待できます。全校で同じ方向で取り組むことで、育ちや学びのつながりを意識して研究を進めました。

研究は地道な作業ではありますが、義務感ではなく、日々の授業とリンクさせ、教師自身も楽しんで語り合い成長していくことが重要です。そこから、児童生徒の変容につながり、教師も手応えを感じるという好循環を生み出していくことが研究の醍醐味でもあると思います。果たして今年は、教師集団「も」学びをつないだ研究になったでしょうか。永遠の課題ですが、目指していきたいものです。

結びになりますが、今年度は年3回全校授業研究会を公開で実施し、県内外からオンラインも含めて多くの方に御参加いただきました。たくさんの御意見・御感想をいただきました皆様、そして御多忙の中にもかかわらず、事前研究会も含めて何度も足をお運びくださり貴重な御助言をいただきました、秋田大学教育文化学部名誉教授 武田篤先生、秋田大学大学院教授 藤井慶博先生、秋田大学教育文化学部教授 前原和明先生に心より感謝申し上げます。

令和6年3月  
秋田県立ゆり支援学校  
校長 近藤 千晴

## ◇ 目 次 ◇

<巻頭言> . . . . . 校 長 近 藤 千 晴

○研究の概要 . . . . . 1  
「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成

○授業づくりの実際  
小学部 . . . . . 7

中学部 . . . . . 13

高等部 . . . . . 19

寄宿舎 . . . . . 25

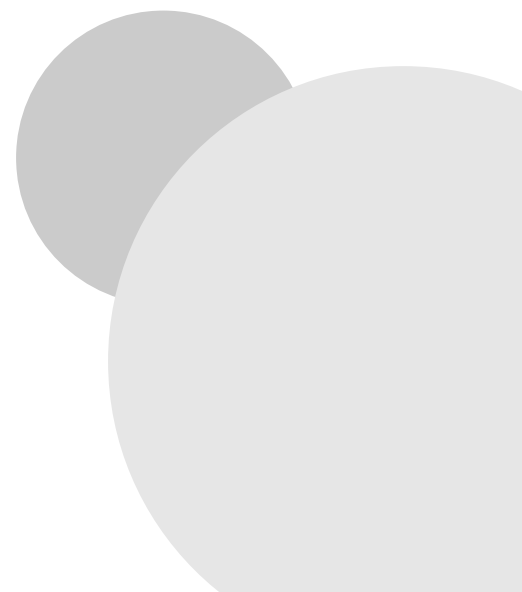
○研究のまとめ . . . . . 31

研究の歩み . . . . . 35

研究同人 . . . . . 36



# 第1章 研究の概要





## 研究主題

# 「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成 (2年次/2年計画)

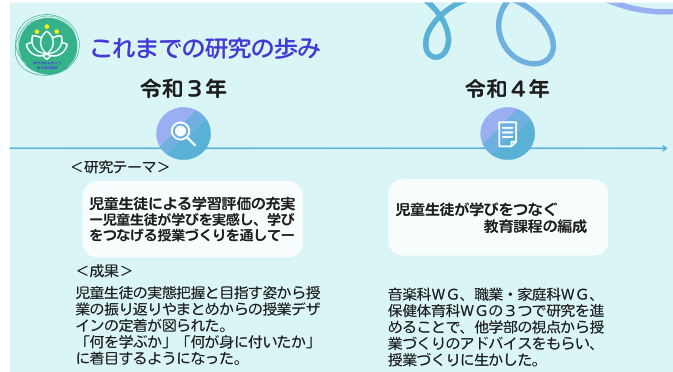
## 1 研究主題設定の理由

### (1) 本校の目指す学校像とこれまでの研究の取組

本校は、目指す学校像を「地域と共に歩み、地域で育ち、地域に必要とされるゆり支援学校」とし、児童生徒の自立と社会参加を目指し、教育的ニーズに応じた適切な教育活動を展開している。平成30年度からは学校運営協議会を設置し、特色ある教育活動を推進するとともに、地域交流・地域貢献を通して地域を元気にする学校づくりを推進している。

この目指す学校像を具現化するために、令和

4年度から研究主題を「児童生徒が学びをつなぐ教育課程の編成」とした。「児童生徒が学びをつなぐ」とは、児童生徒が学習内容に見通しをもったり、学んだことを活用し、次の学習へ生かしたりしている状態を指し、児童生徒が学びをつなぐために、教師は学びをつなげるための具体的な言葉掛けや学んだことを家庭と連携したり、教室へ掲示したりするなど支援の工夫を行ってきた。令和4年度は音楽科、職業・家庭科、保健体育科の三つの教科ワーキンググループ（以下WG）を柱とした研究の推進に取り組んだ。令和4年度の成果や今後に向けては以下のとおりである。



＜令和4年度の成果と今後に向けて＞ ○成果 ▲課題 →今後に向けて  
教科WGを柱とした研究の推進により、各教科の免許保有者や学部を越えた多面的な視点からアドバイスをもらい、授業づくりに生かすことができた。

#### 【音楽科WG】

○校内外の専門家の人材活用による本物の体験

○各教科等との関連の充実

#### ▲活用できる年間指導計画の検討

→各学部の系統性を図り、学習内容の検討をしたり、校内外の人材を効果的に生かしたりする。

#### 【職業・家庭科WG】

○教師の学びをつなげることに対する意識の向上

○中学部の職業・家庭科の学習内容の整理

#### ▲学びの積み重ねの検討

→中学部に「職業・家庭科」を新設、実践と検証をし、学部間の学びのつながりを検討する。

#### 【保健体育科WG】

○他学部とのつながりの確認

○専門的な知識を要する人材活用による、学習意欲と体力の向上

#### ▲学習指導要領の押さえ

→運動習慣や生涯学習へ学びをつなげる学習内容の工夫や校内・地域資源の活用をする。

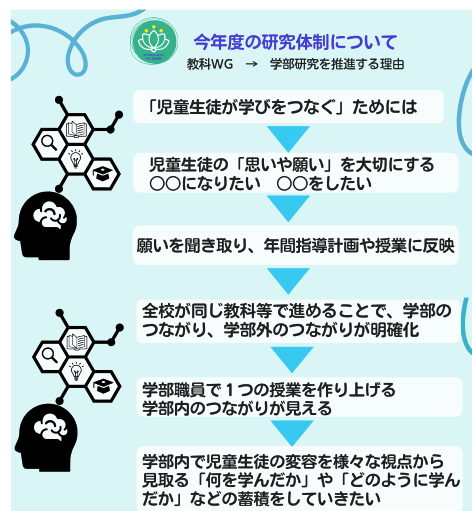
また、令和4年度の研究のまとめでは、教育課程編成に向けて三つの提言が挙げられた。

- ・学習指導要領の着実な実施に向けた年間指導計画の内容と活用の検討
- ・学部間のつながりを意識した弾力的な校内職員の配置と活用
- ・「何を学ぶか」を見通す児童生徒との計画、目標、評価の共有

令和4年度の研究実践は三つの教科WGで進めてきたが、教科WGと学部研究の授業づくりの両立が難しい場面が見られたという反省があった。また、学部内で職員が三つのWGに分かれているため、学部職員で授業を検討しにくかったり、学部内のつながりがもちにくかったりするなどの課題が挙げられた。それらの課題を解決するために、学部を中心とした授業実践、研究推進をし、学部内での学年のつながりや、児童生徒の変容などを学部の職員で共有していきたいと考えた。

そこで、令和5年度は小学部は遊びの指導、生活単元学習、中学部は新設される職業・家庭科、高等部は職業科を研究対象授業とし、教科間でどのように学びがつながっているか、児童生徒が他教科等にどのように学びをつなげているかという視点で教育課程の編成を検討したいと考えた。令和4年度の研究対象であった音楽科、保健体育科に関しては、系統性や授業計画の検討など1年目の課題を解決できるよう、担当職員で学部を越えた話し合いを設定するなど、日々の授業実践を通して教育課程を改善する。

また、年間指導計画、キャリア・パスポート（未来へのスケッチ）を用いて児童生徒の思いや願いを大切にしたい授業づくりを展開できるよう、様式や活用の方法を検討し、児童生徒自身が活用できるものに変更したいと考える。「何を学んだか」や「どのように学んだか」などを明らかにするために、児童生徒の振り返りや学びをつなぐための場を意図的に設定したり、学びを家庭と共有したりすることで、児童生徒自身が学びをつないだり、振り返ったりすることにつながるものと考えた。



## (2) 社会的背景

平成28年12月の中央教育審議会答申では、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」が求められるとされている。

学習指導要領では、学校で学んだことが、明日、そして将来につながるように、育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づき整理されている。その際、特別支援学校では学びの連続性を重視し、各学部や各段階、小・中学校の各教科及び高等学校の各教科・科目とのつながりを大切にしている。これまで各教科等を合わせた指導が教育課程の中心として行われてきた知的障害特別支援学校においても、各教科の指導の充実は、今後取り組むべき課題であることが示唆された。

そこで、本校の目指す学校像、昨年度までの社会的背景、研究の取組を踏まえ、本研究主題「『児童生徒が学びをつなぐ』教育課程の編成」を設定した。

## 2 研究の目的

これまで、児童生徒が学びをつなぐために必要な方策を考え、授業実践をしてきた。しかし、児童生徒自身が、学びがつながったという実感をもったり、次の学びに生かしたりする場面は限定的なことが多く、学びをつなぐためには教師が授業づくりや学んだことの評価方法などを工夫していく必要がある。また将来の生活を見据えると、地域資源を活用しながら学んだり、学んだことを家庭でも実践できるよう、学びの成果を保護者に知ってもらったりして家庭と連携をして取り組むことが必要である。そうした取組の中で、学びがつながった経験をすることで学ぶことの喜び、新しく知識を得る楽しさなど興味・関心の広がり、将来の豊かな生活につながることを考える。このことから、日々の授業を通じた児童生徒の姿が、どのように学びにつながっていくか見取っていくことで、教育課程の改善を図り、生涯にわたって学び続ける児童生徒を育成したいと考えた。

\* 「児童生徒が学びをつなぐ」については次のページ参照

### 3 研究仮説

小学部の遊びの指導、生活単元学習、中学部の職業・家庭科、高等部の職業科を対象授業として、児童生徒の思いや願いをくみ取った授業計画を作成し、児童生徒の学びをつなぐ様子を見取り、学びの履歴を視覚的に示すことによって、小・中・高の学びの連続性を重視した教育課程の編成ができるであろう。また、年間指導計画や「未来へのスケッチ」の様式を検討し活用できるものにする事で、学びがつながる経験を児童生徒自身が実感でき、生涯にわたって学び続ける児童生徒の育成につながるであろう。



「児童生徒が学びをつなぐ」とは、児童生徒自身が学びを見通したり、学んだことを活用し、次の学びに生かしたりしている状況を指している。また、児童生徒が学びをつなぐために、教師は学びをつなげる様々な支援を行う。

「学びをつなぐ対象」は、次の学び（学習）、他の場面（家庭や寄宿舎、地域社会）、他教科等、学年や学部間などを想定している。

### 4 研究の内容と方法

一年目の研究を踏まえ再編した教育課程の検証を行い、小・中・高の学びの連続性を重視した教育課程の改善をする。

#### (1) 年間指導計画を活用できる様式に変更

- ・年間指導計画の様式に教師、児童生徒、保護者の思い・願い（教育的ニーズ）を基にした指導内容を入れる。
- ・指導の根拠となるように学習指導要領の段階や内容を記入する。
- ・評価の欄に視覚的に分かりやすいように写真や教材等を入れる。
- ・次年度への引継欄を設ける。

#### (2) 全校縦割りミーティングの実施

- ・年3回（5月、8月、1月）の全校縦割り授業デザインミーティングを実施し、他学部の視点から意見をもらい年間指導計画の検討、単元や題材検討、授業内容の検討、児童生徒の変容の共有などを通して、学びのつながりを意識できるようにする。

#### (3) 「未来へのスケッチ」の様式の検討と、児童生徒の「思いや願い」を大切にした実践

- ・学部ごとに「未来へのスケッチ」の様式や活用方法を検討し、児童生徒の思いや願いを書き込んだり、自分の学びを蓄積し、振り返ったりできるようにする。

#### (4) 「何を学んだか」や「どのように学んだか」など目標や評価の共有

- ・児童生徒が学びを振り返ったり、学びの見通しや学びのつながりをもてたりできるよう、単元前に児童生徒が目標を設定する機会や、単元後に学んだことなどを振り返る機会を意図的に設定する。


## 5 研究の実際

### (1) 年間指導計画を活用できる様式に変更

令和4年度の実践から、年間指導計画をより活用できるものに変更したいと提案があった。そこで、以下のように変更をして活用した。

- ・教師、児童生徒、保護者の思い・願い（教育的ニーズ）を基に指導内容を検討する。
- ・学習指導要領の段階や内容を記入する。
- ・視覚的に分かりやすいように評価の欄に教材や板書などの写真を入れる。
- ・次年度への引継ぎ事項を記入する欄を設ける。

年間指導計画を立案する際に、学習指導要領と照らし合わせて段階や内容を入れ、どの領域や分野を取り上げているか確認することができ、年間計画を考える際の根拠となった。

月	題材・単元名	主なねらい	内容
4	外国人で歌おう 中学1、2段階 A表現A(7)	学習指導要領 段階や内容を記入	「 来へのスケッチ」 と手と手」
6	リズムをたたくこと をせよう 中学1、2段階 A表現イ(7)(9) B観察A(7)(4)	音律や律の興味を知り、4小節～8小節のリズムを創作する。 音の進度や曲感に合わせて表現する。 体の動きや音の重なりを合わせて表現する楽しさを感じる。	音の基礎基本 (四分音符、八分音符、休符) 創作したりリズム発表 曲に合わせてダンス
8	秋田の音楽を知ろう 中学1、2段階 A表現ホ(7)(4) B観察A(7)(4)	いろいろな演奏形態による楽器の音色や演奏のよさを知る。 曲を聴いて感じたことを言葉や身体表現、簡単な大衆演劇で表現する。	学歴まつりの大鼓リズム 大いなる秋田の音楽、歌 秋田の民謡の鑑賞、歌
評価	歌うことが得意な生徒が多く、歌、スクリーンなどを活用して 「評価に教材等の写真を 入れる」 引継ぎ欄を設定		

### (2) 全校縦割りミーティングの実施

年3回（5月、8月、1月）に全校縦割りでの授業デザインミーティングを実施し、全校授業研究会と学部授業研究会の授業について単元検討や授業内容、児童生徒の変容などを検討、共有する機会とした。研究対象授業についてデザインミーティングを行い、教科を通しての縦のつながりや教科以外の横のつながり、児童生徒の変容について情報を共有した。

5月	年間指導計画検討、単元・題材検討
8月	授業内容評価・改善 他教科との学びのつながり検討
1月	児童生徒の変容共有 次年度に向けての提言



#### 授業デザインミーティング②8/22

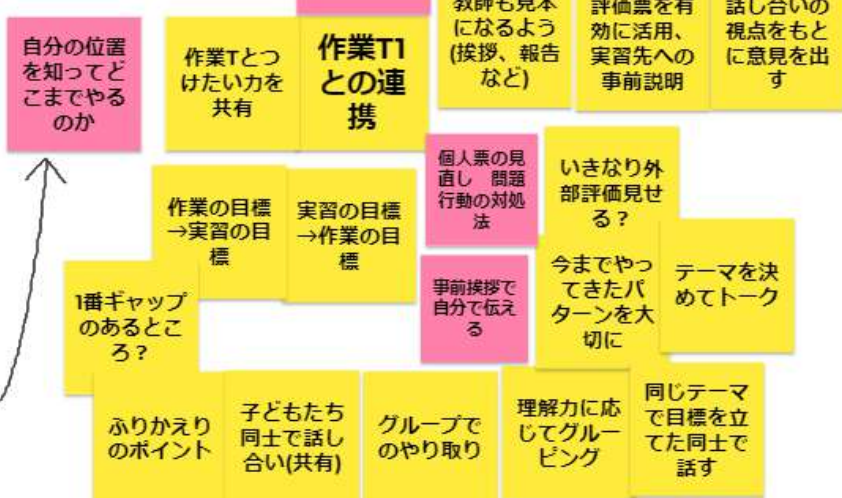
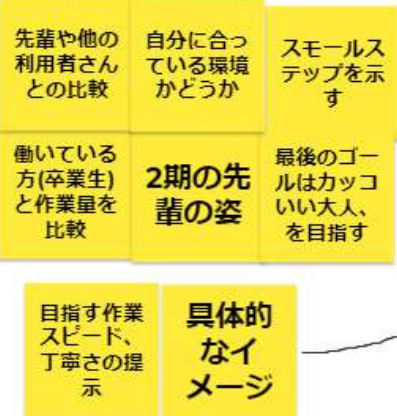
#### E 高2 職業科IIグループ

##### 授業内容の評価

##### 【2学期に向けて】

- ・作業学習と2期の実習をつなぐ
- ・自己理解(個人内評価と外部評価のギャップ)

##### 雰囲気よくする挨拶 自分の売りを見付ける



【授業デザインミーティング2回目で話された内容】

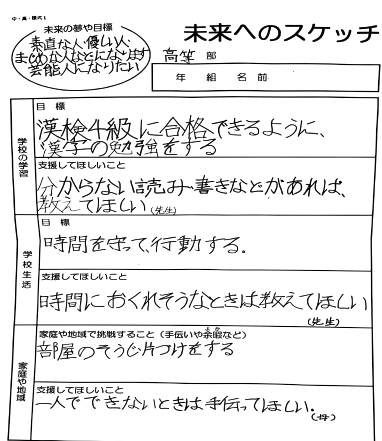
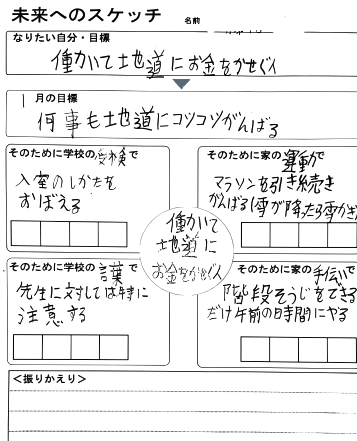
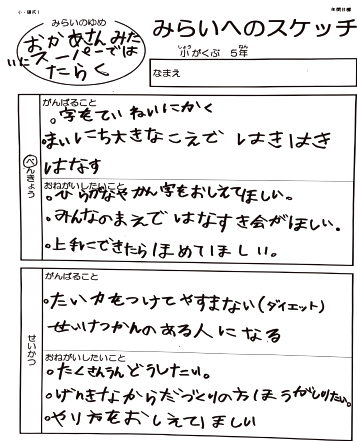


### (3) 「未来へのスケッチ」の様式の検討と、児童生徒の「思いや願い」を大切にしたい実践

令和4年度の実践から、児童生徒の「思いや願い」を年間指導計画や授業づくりに生かしたいと提案があった。そこで、「未来へのスケッチ」(キャリア・パスポート)を活用し、児童生徒の「思いや願い」を聞き取り、授業や日々の学校生活に反映できるようにした。

(学部ごとの「未来へのスケッチ」については、各学部の研究の実際を参照)

<小学部>学年の実態に合わせて様式を工夫した。多くの学年において、個別の指導計画と関連付けて作成したり、作成後に保護者へ早期に知らせたりした。  
 <中学部>様式を見直し、一か月ごとに目標設定と振り返りをしていく形に変更した。夢や目標を達成するために家や学校で何を頑張るのかについて担任との対話や友達とのやり取りから自分で目標を考えて作成した。  
 <高等部>1年生は前期・後期、2・3年生は学期ごとに目標設定と振り返りをした。現場実習の振り返りと未来へのスケッチをリンクさせ、実習の事後学習を通して自分のことを振り返り、今の自分がやるべきことについて記入した。また、卒業後の自分の姿を想像し、そのために今、何が必要なのか考えながら作成した。



【小学部「未来へのスケッチ」】 【中学部「未来へのスケッチ」】 【高等部「未来へのスケッチ」】

### (4) 「何を学んだか」や「どのように学んだか」など目標や評価の共有

児童生徒が「何を学ぶか」を見通すためには、「何を学んだか」「どのように学んだか」の視点を持ち、目標や評価の共有をしていくことが必要であると考えます。そのために、未来へのスケッチ(キャリア・パスポート)を活用しながら児童生徒が学びを振り返ったり、日々の授業の振り返りや学びの積み重ねを児童生徒自身が見えるように工夫したりして、学びの見通しや学びのつながりがもてるようにした。

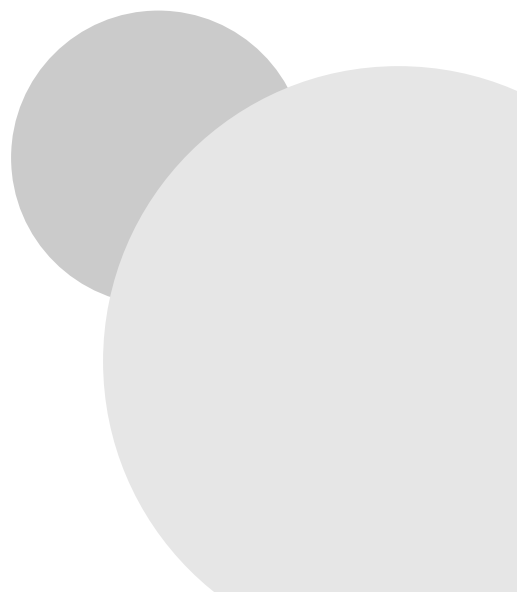
	「未来へのスケッチ」	授業づくり
小学部	イラスト等の選択肢を活用した目標設定をした。学級の実態に合わせて、毎日の振り返りや学期末の振り返りをした。自己評価に加え、他者評価も加えた評価を行った。	興味・関心の幅が広がるように、活動内容や展開の工夫をした。校内の人材を有効に活用し、学習に対する意欲の向上を図った。
中学部	夢や目標の他に月ごとの目標を立てて振り返ることにした。生活面や態度面など自分の課題を見付けて目標設定をした。	職業・家庭科で学んだことをワークシートや新聞形式にまとめて教室前に掲示し、学びを様々な人に見えるように工夫した。
高等部	自分の課題を日常生活に結び付けながら考えることができるよう、生徒と教師の面談を通して自己理解を深めながら目標を設定した。	実習の成果・課題や、I期実習とII期実習の比較から自分の成長が見えるようなワークシートや掲示物を作成し、掲示した。

<資料 1> 令和 5 年度研究計画

月	全体の流れ	具体的な取組		
		全校	縦割りでの検討・学部研	その他
4月	○全体の研究主題、研究内容及び方法の検討、共通理解 ○学部の研究内容、方法の検討 ○児童生徒一人一人の目指す姿の明確化（個別の教育支援計画）	□全校研①（4月24日） ・全体研究の共通理解	□学部研①（4月28日） ・学部における研究対象教科の実態把握と課題の確認	□拡大研①（4月18日） ・研究内容・方法の検討
5月	○全校、各学部、寄宿舎の研究内容及び方法の共通理解 ○授業実践及び評価、改善 ○単元、題材計画の検討 ⇒授業デザインミーティング実施	□全校研②（5月9日） ・学部、寄宿舎の取組の共通理解 ・学習指導案の様式の共通理解 □授業デザインミーティングの実施 5月29日 ⇒ ①授業者間、②関係者間での検討（全校縦割りによる検討を行う）		□クォーター研修会の実施（月1回程度）
6月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施		□学部研②（6月14日） ・各学部での授業実践	
7月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施 ○単元構成や支援の評価、見直し ○児童生徒の変容を検証、評価、目標の見直し		□学部研③（7月14日） ・授業実践、評価、改善 □学部研④（7月26日） ・授業の成果の共有と評価	○全校授業研究会 小：7月10日 中：11月28日 高：9月28日 ○学部授業研究会 小：6月30日 中：10月3日 高：11月20日
8月	○前期の評価と後期に向けた単元構成、支援の検討、共通理解 ○学級及び学部内で児童生徒の目標の共通理解	□授業デザインミーティングの実施 8月22日 ⇒ ①授業者間、②関係者間での検討（全校縦割りによる検討を行う）		
9月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施		□学部研⑤（9月13日） ・目標に対する評価、改善、後期の研究、単元計画や教師の支援の共通理解	
10月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施		□学部研⑥（10月11日） ・授業実践、評価、改善 ・各学部の一貫性の検討	○年次研修 ・対象者と調整 ○他校（特別支援学校、由利本荘・にかほ地域の小・中学校）の授業研究会、公開研究協議会等への参加
11月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施 ○今年度の取組の成果と課題、児童生徒の変容の検証		□学部研⑦（11月22日） ・授業実践、評価、改善 ・児童生徒の変容の検証	
12月	○今年度の成果と課題、児童生徒の変容の明確化  「研究ゆり」の執筆	教育課程検討委員会 キャリア推進委員会 との連携	□学部研⑧（12月6日） ・成果と課題、児童生徒の変容の検証 □学部研⑨（12月20日） ・研究のまとめ	
1月	○今年度の成果と課題の共通理解 ○次年度の方向性の具体化	□授業デザインミーティングの実施 1月11日 ⇒ ①授業者間、②関係者間での検討（全校縦割りによる検討を行う）	□学部研⑩（1月17日） ・研究のまとめの共通理解 ・今年度の成果と課題、児童生徒の変容の共通理解	□拡大研②（1月24日） ・今年度のまとめと次年度の研究テーマ検討
2月	○今年度の成果と課題の共通理解 ○次年度の方向性の具体化	□全校研③（2月5日） ・今年度のまとめと次年度の検討	□学部研⑪（2月19日） ・教育課程の編成に向けての検討 ・次年度の取組の検討	
3月	○次年度の方向性の共通理解	□全校研④（3月13日） ・各学部、寄宿舎の成果と課題の共通理解 ・次年度の取組の検討 □出張報告会（同日）		



## 第2章 授業づくりの実際



# 小学部

## 1 はじめに

昨年度の研究より、小学部段階では、児童の「好きなものをたくさん見付ける」こと、「興味・関心を広げる」こと、「生活経験や伝える経験の積み重ねが大事」であることが話題に上がった。

小学部児童の実態として、低学年は、学級への所属意識が高まり、友達や先生など、身近にいる人を意識してきている。繰り返し取り組んでいる朝の活動などは、流れや取り組む内容が分かり、流れに沿って一人で取り組むことが定着してきた。高学年は、仲間意識が高まり、お互いを意識し合っただけで学び合うようになってきている。また、合同の学習場面において全体指示への気付きが高まり、自ら動くことも増えてきた。一方で、小学部全体として、学校と家庭とで情報を共有し、連携して進めることが課題として上がった。

これらの実態から小学部の今年度の研究の方法とゴールは以下のとおりである。

- ①事例対象児の効果的な支援を見出し、授業に反映させること
- ②教科横断的な視点や学年、学部間のつながりを意識した授業実践の積み重ね
- ③未来へのスケッチが家庭とより連携を図るためのツールとなるよう様式や活用方法の検討

そのような取組を重ねることで、児童の楽しい、できたなどの経験が学びをいろいろな学習や家庭など様々な場面で活用する姿へつながるのではないかと考える。

## 2 授業デザインミーティングの実施

対象授業 小学部 4年 生活単元学習

### <授業デザインミーティング5月（出されたアイディア）>

- ・学校で学んだことや学ぶ前と後の変化、成果等を家庭へ伝え、共有する。
- ・「うまくできた」、「もう少し」に気付くことができるような言葉掛けをする。
- ・ポイントを合言葉にして動画で○か×を振り返る。
- ・言葉と動きを一緒に教える。
- ・動画を撮影し、即時評価する。
- ・そろえる感覚を身に付けるために、折り紙を使う。
- ・合わせる部分の分かりやすいようにシールを貼る。
- ・振り返りの評価のポイントを分かりやすくする。
- ・チェックシートを活用し、写真と見比べる。

R5 授業デザインシート

学習グループ及び指導の形態	小学部4年 生活単元学習
指導者	廣田 藤洋 高野 佐藤由
子どもの思いや願い(自立活動の視点も含む) ・友達と一緒に、友達と仲良くしたい。(人間関係の形成、心理的な安定…安心) ・やることの順番や手順が分かること安心。(心理的な安定…見通し) ・自分のできることをみんなに見てほしい、褒めて欲しい。(人間関係の形成、コミュニケーション…やりとり) ・難しい学習をがんばりたい、上級生のようにになりたい。(心理的な安定…意欲) ・家でお手伝いをして褒められるとうれしい。(心理的な安定、人間関係の形成…かわり)	
学習グループ全体で育みたい姿、教師の思いや願い ・身の回りのことや簡単な家事の仕方を覚え、学んだことを学校や家庭で実践する ・「できた」の経験を積み重ね、自信をもつ ・友達同士で褒め合う、認め合うなどしながら学び合う姿	
年間の単元計画	系統的な視点から ・基本的な生活習慣の確立 ・自分のことは自分で行うための技能の習得 ・社会のルールやマナー(常識)
年間の単元計画 ・入浴指導(宿泊事前学習にて、5年生と合同) ・服畳み・歯磨き・食へる時のマナーについて ・スプーン洗い・ハンカチ手洗い・手洗い ・栄養について・手洗・まどめチェックテスト	教師の支援(手立て) ・学習の履歴が分かるよう、ワークシート、写真、動画で記録をする。 ・授業以外にも(体育の際の着替えや掃除)場面を捉えて指導し、統一した支援、言葉掛けを行う。 ・家庭でも実践できるように、学習の様子を家庭に紹介(連絡帳、通信等)し、長期休みの宿題にする。 ・自分の様子を振り返ることができるよう、カメラやiPadを活用し、客観的に見て評価できるようにする。
授業の工夫(しかけ) ・寄宿舎児童や栄養士、保健室等の各専門家の活用。 ・特別席からやる気アップや正しい知識技能を身に付ける。 ・学年で学び合う場、学級でじっくり練習する場の効果的な設定	関連する各教科等(内容を含む) ・日常生活の指導(身辺処理、清潔、物の管理など) ・国語(指示理解、関連するものや動きの名前) ・算数(数、右左) ・保健体育(衛生、栄養) ・自立活動(心理的な安定、人間関係の形成、身体の動き、コミュニケーション)

【図1 授業デザインシート】

### <授業デザインミーティング8月（話題になった内容）>

- ・2年生に教えることを意欲としてタオル畳みを頑張っていた。
- ・家庭で手伝いをしたり、話し合いの方法を知ったりと授業を積み重ねた成果が見られた。
- ・話し方、聞き方などのルールを教えていきたい。
- ・中学部や高等部から教わったり、相手に発表したりする機会を設定してはどうか。
- ・まだ話し合いへの参加は難しい児童もいる。自己選択の経験を積み重ね、話し合いにつながる素地を作りたい。



【図2 話合ったジャムボード】

### 3 授業の実際

#### (1) 小学部1・2年 遊びの指導 「わくわく・しんぶんし！～ゆりどうぶつえんであそぼう～」

(学部授業研究会：6月)

小1・2年の遊びの指導では、一つの素材を中心にいろいろな遊び方に気付き、時間いっぱい工夫しながら遊んでほしい、1年生には、2年生を見本に関わり方や遊び方など広がってほしいと考え授業を計画した。学びをつなぐためのしかけと児童の様子は以下のとおりである。

<授業のしかけ>	<児童の様子>
<p><b>導入の工夫</b> 本時の遊びへの興味、期待感を高めるために導入での新聞紙を使ったマジックショーをした。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・?ボックスがワクワクする仕掛けで、何が出てくるか興味をもって見ていた。本時で提示する教材が出てきて、話しながら説明するより、関心をもって見ていた。</li> </ul> 
<p><b>ダイナミックな活動</b> 合同学習だからこそできるダイナミックな遊びを保証するために新聞紙カーテンを使った遊びを設定した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・真っ先に新聞紙カーテンを引っ張ろうとしていて、楽しめていた。一つの教材にみんなが集まっており、効果的だった。</li> </ul> 
<p><b>なかよしペアの設定</b> 友達への意識や2年生は上学年としての意識を高めるために設定した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・回を重ねるごとに2年生が1年生に対して誘う場面が見られ、1年生も手をつなぐようになった。チケットがあり、ペアで入場する必要性があり、関わり合う姿が見られた。</li> </ul> 
<p><b>展開の工夫</b> 遊びへ変化をもたせ、場面転換をするために大型のカバを登場させた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カバに関わろうとみんなが集まることができた。なかなか自分から関われない児童もカバの中に入ったり、新聞紙をえさに見立て与えたりするなど同じ場を共有し遊んだ。</li> </ul> 
<p><b>教師の支援</b> 教師も児童と一緒に一生懸命遊び、教師が遊び方の見本を提示した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞紙を丸める、ちぎるなど、新聞紙カーテンがなくなった後も、遊び方の見本をまねる児童がいた。教師が積極的に遊びをリードするより「一緒に」「発展するきっかけづくり」のスタンスで支援したため、児童の主体的な姿があちこちで見られた。</li> </ul> 

#### <授業研究会をうけて>

授業研究会の指導助言では、遊びをつなぐための大事なステップとして、「ヒトとモノ」、「ヒトとヒト」、「ヒトとモノをつなげてコトにする」の段階を踏むことが大事であると助言があった。今回の授業は、「ヒト」と「モノ」をつなぐ段階である。そこからより「ヒト」への意識を高めていくことで「ヒトとヒト」をつなげていくことができる。遊びの中で大事なことは学びは個人ではなく、協働で学び合うことであることを大事に、児童に考えさせる工夫や子どもとの対話の促進を取り入れながら今後も取り組んでいく。







【図3 遊びの指導の方向性】

(2) 小学部4年 生活単元学習 「チャレンジ8～たたみ名人になって2年生を助けよう～」

(全校授業研究会：7月)

小4の生活単元学習の授業では、寄宿舎指導員よりフェイスタオルの畳み方を教わり、うまくタオルが畳めない2年生に教えたい、学んだことを普段の学校生活や家庭でのお手伝いにつなげたいと考え授業を計画した。学びをつなぐための授業のしかけと児童の様子は以下のとおりである。

＜授業のしかけ＞	＜児童の様子＞
<p><b>話し合い活動</b> 全員が話し合いに参加できるよう、中心となり進める児童、友達の話を聞いて考えをもつ児童、友達の意見の中から意思表示する児童でメンバー構成した</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話すことが得意な児童は自分の意見を伝えるだけでなく、「〇〇さんはどう？」「どっちがいい？」と友達に問い掛ける姿が見られた。</li> <li>・友達の意見を聞いて同意や意見を話したり、複数の意見から選択しながら自分の考えを伝えたりすることができた。</li> </ul> 
<p><b>気付きを促す場面の設定</b> 児童が自分で課題に気付いたり、どんな教え方が分かりやすいか考えたりできるように、教師が悪い例を演示した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師が話し方、畳み方などの悪い例を行ったことで、「声が小さい」「聞こえない」「見えない」など自発的に気付いたことをつぶやいていた。そのつぶやきに対して「どうしたらいいかな？」と発問すると、「大きな声」「気を付けの姿勢」などと答えており、どうしたら分かりやすいか考えることができていた。</li> </ul> 
<p><b>ICTの活用</b> めあてや話し合いの内容につながる場面に注目して考えることができるように、教師の演示を事前に録画して大画面で映した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・モニターに映したことで注目して見ていた。</li> <li>・話し合い活動の際に、何度も見返したり、注目してほしい部分を止めたりしながら見たことで、自分の考えを整理して伝えることができた。</li> </ul> 
<p><b>視覚的な支援</b> 話し合い活動で、児童の意見を引き出すために、児童の実態に応じて入らすとカードや静止画を提示した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師の演示の録画や話だけでは理解が難しい児童も、イラストや絵を見て自分の考えを思い付いたり、選択して伝えたりすることができた。</li> </ul> 

＜授業研究会をうけて＞

○2年生へ教える活動

2年生にタオルの畳み方を教えに行った。お話し係、見せる係、お手本係に分かれ、それぞれ自分が担当する係に取り組み、タオルの畳み方を演示したり、説明したりすることができた。

○家庭との連携

夏休みの宿題として、「おてっだいカード」を作成した。タオルの畳み方を写真と文章でカードに記載したことで、保護者へ学習した畳み方の手順を共通理解することができた。学校で学んだことを生かして毎日タオル畳みを行う児童や、夏休み後も家庭でのお手伝いとして継続して行う児童も見られた。



【図4 おてっだいカードの活用】

#### 4 「未来へのスケッチ」の検討や活用

昨年度から小学部での「未来へのスケッチ」の作成が始まり、授業での活用の仕方や提示の仕方、保護者との連携などについて情報共有してきた。昨年度の実践より、様式の使いづらさや目標等の設定の仕方について話題が上がった。そこで今年度は、「未来へのスケッチ」の様式を学年の実態に合わせて変更し活用すること、目標等を決める際のやり方を情報共有し、検討していくこととした。

##### (1) 様式や活用の検討

小学部は1年生から6年生まで実態や学んできた学習履歴等を考えると、同じ様式を使うことの難しさがあつた。現在の様式を基に協議し、話題に上がったことは、以下の三点である。

##### ① 様式の検討

実態に応じて好きなことや得意なことを自分の履歴としていく方法や夢や目標をイラストなどで視覚化する方法も考えられる。例えば、新入生については、夢や目標を考えることが難しいため、好きなことや得意なこと、できるようになったことなどを具体的に残すことで次の目標を立てる際の指標としての活用も考えられる。

##### ② 家庭との連携

学校と家庭が同じ方向を向いて取り組むことのできる目標設定とし、長期休み等を活用した課題の提示など働き掛け方を工夫していくことが必要となる。

##### ③ 評価

児童の実態によっては、毎日、自己評価をすることで効果がある場合もあり、評価のタイミングは担任が見極めて実施していくことが必要である。しかし、適切な自己評価が難しい児童もいるため、他者評価も入れることで適切な評価へとつなげていきたい。

【図5 「未来へのスケッチ」実践例】

##### (2) 中学部へとつながる活用

中学部とのつながりを考え、卒業学年では、中学部で使用している様式を使うことも今後、検討している。

今年度は、3学期に中学部の月ごとの目標設定に使用している「レベルアップを目指そう」(中学部の実践よりP. 15参照)を活用することとした。中学部生になるために自分自身を見つめ直す機会と捉えることができるよう指導に生かしていきたいと考える。

【図6 中学部「レベルアップを目指そう」の活用】

## 5 まとめ

### (1) 児童の学びをつなぐ

事例対象児について話し合った効果的な手立ても入れながら、教科横断的な視点や学年間のつながり、家庭との連携を意識して授業づくりを行った。

低学年では、興味・関心の幅が広がるように、一つの素材から活動内容を工夫したり、展開の仕方にメリハリをつけたりした。また児童同士をつなぐため遊びの場を共有したり、ペアで活動したりするなどの工夫をした。繰り返し取り組んだことにより、他の教科等の中でも、児童同士の関わりが広がり、身近な人へ気持ちを言葉や身振りなどで伝えるようになった。高学年では、学校での学びを更にスキルアップするために、授業の中で寄宿舎指導員を活用した。活用を通してスキルアップだけでなく、第三者からの評価が自信へとつながり学ぶ意欲への向上へとつながった。更にできたことややり方などを伝えるだけでなく、家庭でも取り組む場面を具体的に設定することで家庭生活で生かす姿へつながった。

### (2) 児童の変容

児童同士が学び合う実践を積み重ねてきたことで、身近な人を意識して関わるが増えてきた。低学年では、学級での所属意識が更に高まり、みんなと一緒に活動するために事前の約束やルールなどを意識して取り組む姿が見られるようになってきた。また、自分の気持ちだけでなく、自分の意に反することがあっても、相手の気持ちを考え、歩み寄ることも増えてきている。高学年では、話し合い活動でのルールや約束を繰り返し確認してきたことで、挙手してから発言する、分からないときには聞く、周囲の意見を聞くなどの姿が見られるようになった。また、自分の意見を伝え合う活動を取り入れたことで、自分の行動を適切な形で言語化したり、友達の意見を聞いたりするなど相手を受け入れたり、考えの違いに気付いたりする姿へつながってきた。

### (3) 教師の関わり方の変容

事例対象児を中心に自立活動の視点から児童の現状（できること、課題、必要な手立てなど）や環境要因など子ども理解シートを活用した丁寧な実態把握をしたことで目指す姿を焦点化し、指導について共通理解して取り組むことができた。学級担任をはじめとして、授業の中で見られたエピソードを紹介し、そのエピソードに基づき、児童の変容に関する協議を通して、児童が学んだことを生活の中で生かしている姿を担任だけでなく、関係する職員が日常的に意識して見取ることができるようになった。また、事例対象児に対する指導が対象児のものだけにならないよう、他の児童へも定着できるような指導・支援を、職員がより意識して取り組むことができるようになった。

### (4) 今後に向けて

事例対象児の変容を追いながら研究を重ねてきたことで、丁寧な実態把握が効果的な支援を見出し、共通した指導・支援が児童の変容へとつながっていることを確認した。今後も丁寧な実態把握により、目指す姿の基盤づくりに引き続き、取り組むとともに、児童の実態に応じた授業づくりに取り組んでいく。そして、今年度の成果をもとに、更に様々な人や物との関わりを築き、学び合い深めることのできる授業が展開できるように工夫していきたい。

一方、家庭との連携が課題にあげられ、家庭と情報共有して取り組むことが児童の学びを定着させることにつながると感じている。そのためのツールとして、「未来へのスケッチ」をより効果的に活用する必要がある。今年度は学年の実態に合わせて様式や活用の仕方を工夫し取り組んできたことで一定の効果はあったが、家庭との連携をより深めるためにも、作成の意義や活用の仕方を丁寧に伝えていく必要がある。また、進路指導部と連携し、小学部の実態に合う様式の検討を更に進め、小学部から中学部、高等部へとつないでいけるようにしていきたい。



【資料】児童の変容のまとめ

<授業を通して得られたエピソード> 対象児童 小学部 4年

○対象児童の実態

- ・自己主張が強く、話合いの経験が少ない。友達ではなく教師に「私は〇〇に決めた」「〇〇は嫌だ」と主張し、自分の気持ちを通そうとする。
- ・友達への関心が高く、自分から関わる。世話好きでやさしく関わることができる。一方で、友達の思いを無視して、一方的な関わりをしてしまうことがある。
- ・衝動的な行動や発言が多く、教師や友達の話を最後まで聞くことが難しい。

○有効だった手立て

- ・生活単元学習の授業で、小グループでの話合い活動を取り入れた。調理や誕生会に向けた活動では、教師が話合いをコーディネートし、グループで一つの意見を決める活動をした。
- ・学年全体で「友達の話を聞く」「みんなで決める」と話合いの約束を提示した。また、グループの友達の思いに気付けるように、「〇〇さんの話も聞いてみたかな」と個別に言葉掛けをした。
- ・友達の様子（相手の話を聞いて意見をまとめたり譲ったりする様子）を紹介し、全体の場で「みんなできなよく決められたね」と称賛して価値付けた。

○対象児童の変容

- ・挙手をして発表したり、話し手に注目して話を聞いたりするなど、基本的な学習態度が身に付いてきた。
- ・話合い経験を重ねる中で、「私は〇〇がいいな。〇〇さんは？」と友達の意見を聞こうとしたり、友達の話を聞いて「いいよ」と伝えたりすることができるようになってきた。
- ・意見が分かれたときは「〇〇さんの（意見で）でいいよ」と譲ったり、自分の意見を推してもらったときは「やった。ありがとう」と友達に伝えたりしていた。
- ・みんなで決めたことを基に、ホットケーキやピザの調理をしたり、誕生パーティーを開いたりすることで、達成感ややりがいを感じ、学習意欲が高まった。
- ・対象児童だけでなく、話すことや書くことなど自分の得意なことを生かそうとしたり、自分の気持ちを選択肢から選んで伝えたりするなど、友達同士のやり取りが増え、集団としての成長につながった。



<授業以外や関連して得られたエピソード>

学校生活 (関連した教科など)	家庭生活など	地域での余暇活動など
<p>体育着やハンカチ、給食のおしぼりなど、「私、たたみ名人になったから」と思い出したように言いながら畳んでいる。</p> <p>掃除の時間、友達と「昨日〇〇さんがやったから私の番」「〇〇さんお願いします」と、ちりとりでごみを集める順番をやり取りして決めようとしている。</p>	<p>家では、洗濯物たたみの手伝いをしたり、自分で学校の持ち物を準備したりしている。</p> <p>兄や妹が大好き。妹のお世話をしたい。妹も成長してきており、けんかが絶えないが、やさしく接しようとしている。</p>	<p>放課後や長期休みは、ほぼ毎日、日中一時支援を利用している。同じ事業所を利用している友達と仲よく過ごしており、行くことを楽しみにしている。</p>

# 中 学 部

## 1 はじめに

中学部生徒の実態として将来への夢や目標について漠然と考えている生徒が多く、学んだことを知識として獲得しても、継続して取り組まないと忘れてしまうことが多い。また、自分の得意なことや苦手なことについて自己理解が適切ではなかったり、相手の立場や気持ちになって考えたりすることが難しい生徒がいる。

将来の生活を見据えて中学部段階から教科として指導したい、高等部とのつながりを意識した指導をしたいと考え、今年度から「職業・家庭科」を新設した。そして、「未来へのスケッチ」(キャリア・パスポート)を活用しながら将来に向けて自分を見つめ直す機会を設定し、働くために必要なことを考えたり、日常生活につながる洗濯や調理活動などを取り入れたりしたいと考えた。

中学部の今年度の研究の方法とゴールは、以下のとおりである。

- ①小中高のつながりや学びのつながりを意識し、昨年度作成した職業・家庭科の「学習内容参考一覧」に沿った授業実践をすること
  - ②また、学校で学んだことを家庭でも生かせるように連絡帳や長期休みの宿題、「未来へのスケッチ」を活用して情報共有をすること
- そのような取組を積み重ねることで、生徒は自分の目標をもち、振り返る活動を大切にし、自分の将来を自分で考えたり、できることを増やしたりできるようになると考える。

## 2 授業デザインミーティングの実施

対象授業 中学部 2年 職業・家庭科

### <授業デザインミーティング5月 (出されたアイディア)>

- ・経験や体験を重視した内容を取り扱う。
- ・家庭科と職業科の比率で、家庭科の時数や内容を多めにする。
- ・基本的な生活習慣(洗顔、入浴、身だしなみ)レンジ調理、おにぎり作りなどを学ぶ機会を設定する。
- ・動画を制作する生活単元学習とリンクして学習する。
- ・職業科、作業学習との関連を考えながら学習し、高等部の学習についても見直しをもてるように工夫する。
- ・栄養士、寄宿舎指導員、高等部ビルクリーニング班の教師、食品加工班の教師など担任以外の教師や、外部講師を活用して専門的な知識のある人から学ぶ。
- ・生徒自身が自分の成長を実感できるように振り返りを大切にする。

R5 授業デザインシート

学習グループ及び指導の形態	中学部 2年 職業・家庭科
指導者	島津・東谷・加藤・川村
子どもの思いや願い(自立活動の視点も含む) ・どんな仕事があるか知りたい。 ・料理や裁縫などできるようになりたい。 ・お金の使い方や管理について知りたい。 学習グループ全体で育みたい姿、教師の思いや願い ・自分の長所や短所を知り、未来へのスケッチ(年間、学期ごと)を書く。 ・洗濯や掃除、簡単な調理など経験し、家庭生活に生かして欲しい。 ・家庭・寄宿舎・学校と連携して、規則正しい生活(3食食べる、ゲームや動画の時間を守る)ができるようになってほしい。	
年間の単元計画 ・清拭について(洗濯、掃除) ・規則正しい生活、バランスのいい食事(自分の生活、栄養、献立、調理) ・日頃の見学、高等部の実習見学(進路について) ・未来へのスケッチ 教師の支援(手立て) ・授業の流れ(全体→グループ→全体など)を同じようにして、見直しをもたせる。 ・活動内容や学習の流れの提示	系統的な観点から
授業の工夫(しかけ) ・ゆあてを自分たちで考える(達成感につながる)…自分たちで全部は難しいと思うので、教師がのせる形がな。	
関連する各教科等(内容を含む) 国語(聞くこと、書くこと、読むこと) 数学(数と計算、測定) 保健体育(体力づくり、健康・安全) 日常生活の指導(係活動、朝・帰りの準備、給食) 作業学習、生活単元学習(読へ学習)	

【図1 授業デザインシート】

### <授業デザインミーティング8月 (話題になった内容)>

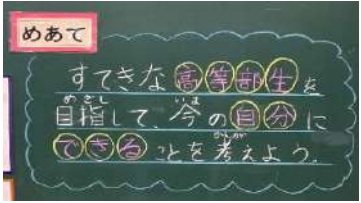
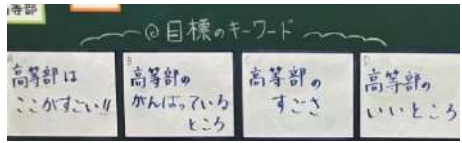
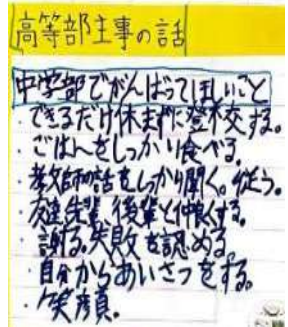
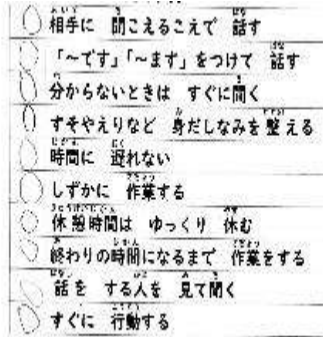
- ・1学期は手洗いの練習を繰り返して清潔を意識付け、調理へつなげた。2学期も手洗いや汗の始末など、清潔面を指導したい。
- ・栄養バランスを色で示したことで、生徒が栄養に注目して考えることができた。栄養士からのアドバイスがとても効果的だった。
- ・視覚支援が有効な生徒が多い。授業の流れを意識できる板書や授業展開を工夫したい。
- ・高等部の作業や実習を見学したり、ビルクリーニング班、食品加工班から教えてもらったりする機会をもちたい。

### 3 授業の実際

#### (1) 中学部2年 職業・家庭科 中学部と高等部の違いについて～今の自分にできること～

(全校授業研究会：11月)

中2の職業・家庭科の授業では、高等部の学習の様子を知り、これからの進路選択や日常生活に生かしてほしいと願い授業を計画した。学びをつなぐための授業のしかけと生徒の様子は以下のとおりである。

<授業のしかけ>	<生徒の様子>
<p><b>めあての共有</b> 生徒との対話からめあてを提示する工夫をした。 &lt;発問例&gt; 〇〇に入る言葉は何でしょうか？</p>	<p>・めあての一部を穴埋めで提示することで、空欄に何が入るだろうと考えたり、黒板やホワイトボードの掲示物を見たりして全員でめあての共有ができた。</p> 
<p><b>キーワードを提示</b> 前時の振り返りとめあての具体化のためにキーワードを設定した。</p>	<p>・前時までにグループでまとめた際のキーワードを提示してそのキーワードについて具体的に質問することで「集中して作業」や「報告の仕方がよい」など目標を考える上で参考となる内容を話した。</p> 
<p><b>タブレット端末の活用</b> 困ったときに手掛かりにできるように目標を考えるためのヒントをタブレット端末に入れた。 &lt;タブレット端末に入れた情報&gt; ・グループごとの模造紙 ・作業学習の5箇条 ・生徒一人一人の作業中の動画</p>	<p>・パワーアップ週間での作業の様子やグループで作ったまとめの模造紙、中学部作業学習5箇条をタブレット端末に入れていつでも見られるようにすることで、タブレット端末の資料を見ながらワークシートを書くヒントとしていた。 *作業学習5箇条はP16参照</p> 
<p><b>ワークシートの工夫</b> 一人で考え、記入できるように生徒の実態に合わせて用意した。 &lt;用意したプリント&gt; ・考えたことを文字で記入 ・質問形式に○×で記入</p>	<p>・文字を書くことが苦手な生徒には選択肢から選んで答えられるようにすることで、自分で考えて選択することができた。また、書くことが得意な生徒には未来へのスケッチと関連付けて考えられるようにし、自分の行動を振り返りながら記入をしていた。</p> 

#### (2) 授業研究会の様子

授業研究会では、「学んだことを日常生活につなげるための教師の支援、手立て」で協議を進めた。協議で話題になった内容として、タブレット端末を活用したり、実態に応じてワークシートを準備したりしていたことが評価された。また、目標と日常生活をどのようにしてつなげていくか、自己理解と他者評価をどうするべきかが話題になった。今後に向けては、考えた目標を短期間で振り返ることができる状況を検討すること、他者評価、評価の方法を検討し自己理解を育むことができる支援をすること、家庭と連携し、生活場面とつなげることなどが挙げられた。

#### 4 「未来へのスケッチ」について

##### (1) 「未来へのスケッチ」の検討や活用

昨年度から「未来へのスケッチ」を記入し始めたが、生徒にとっては「夢や目標に何を記入したらいいか難しい」「考えた目標を意識して生活をするのが難しい」など活用する上での課題が挙げられた。また、教師も夢や目標を意識させながら指導をする難しさを感じていた。そこで、今年度は、「未来へのスケッチ」の様式を生徒が活用できるものに変更した。生徒自身が支援してほしいことを記入するのではなく目標を達成するために何を頑張るかの視点で記入をすることにした。また、夢ややりたい自分については大きい目標を記入し、月ごとの目標も記入し、リンクできるようにした。月ごとの目標については、自分では何を記入していいかわからない生徒が多かった。そこで、まずは参考になるものから選択して記入できればよいと考え、小学校の通知表の生活欄から抜粋した。自分から挨拶をする、時間を守るなど生徒は自分の目標を決めて記入をした。既存のルールだけでなく学級ごとの決まりやルールを決めていくことも大切だという考えから、目標を具体的に変更していくこととした。

さらに、目標を達成するために学校と家庭で分けて何を頑張るか記入するようにした。1か月ごとに新しい用紙に記入することにし、担任、家庭からのコメント欄を設け、週ごとに自分を振り返って○や△でチェックができるようにした。できないことに目を向けるのではなく、できたこと、できるようになったことに目を向けていくこと、夢や目標に向けて努力するもの、自分の行動を振り返るものになればと考えている。

##### <中学部 「未来へのスケッチ」活用方法>

###### 【月初め】職業・家庭科の時間

- ・ になりたい夢や目標を記入
- ・ 月の目標を「レベルアップを目指そう」から選ぶか、自分で考えて記入
- ・ 担任が確認、教室に掲示
- ・ 保護者へコピーを渡す（生徒の目標を知ってもらうため）

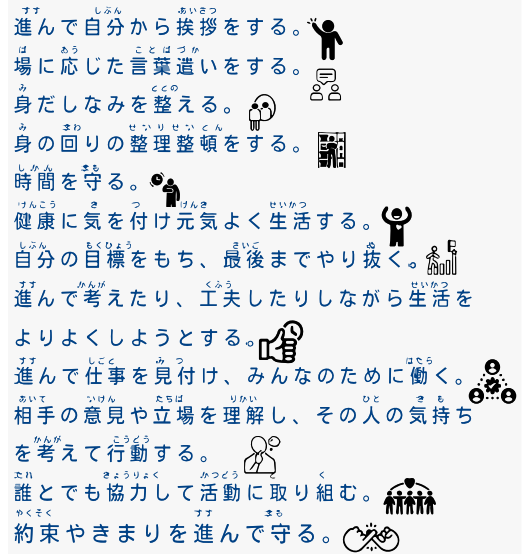
###### 【毎週金曜日】

- ・ 自分が立てた学校での目標、家での目標を振り返る（◎、○、△で評価を付ける）

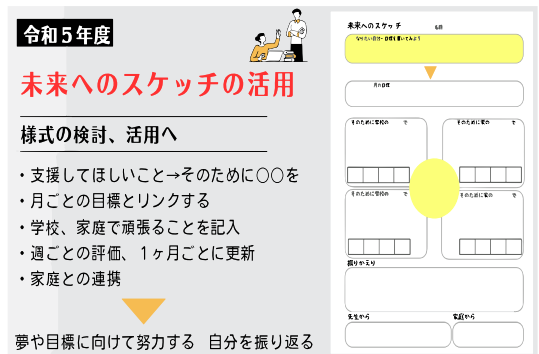
###### 【月終わり】職業・家庭科の時間

- ・ 1か月の振り返りを記入する
- ・ 担任が生徒へコメントを記入する
- ・ 家庭に持ち帰り、家庭からも記入をしてもらう
- ・ 次の夢や目標を記入する

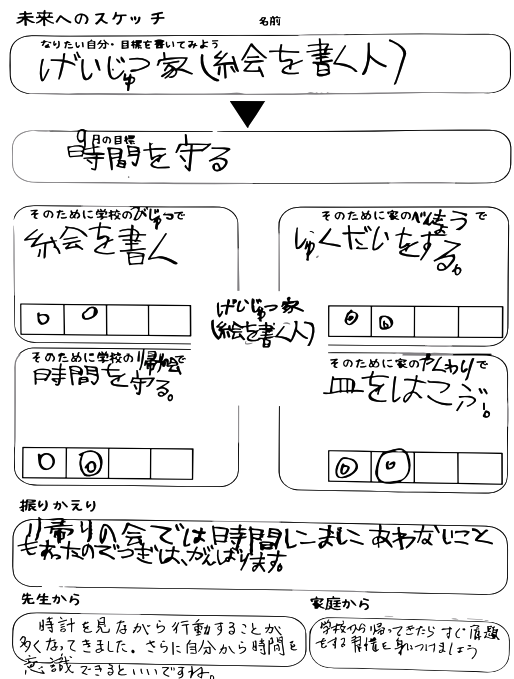
#### レベルアップを目指そう



【図2 月ごとの目標 小学校通知表より】



【図3 「未来へのスケッチ」の活用】



【図4 中2生徒の「未来へのスケッチ」】

## (2) 職業・家庭科と作業学習とのつながり

職業・家庭科の授業を進めていく中で、職業分野は作業学習と深く関わっており、職業・家庭科と作業学習をリンクさせながら学習を進めていくことで生徒自身の学びが繋がっていくだろうと考え、今回の授業でも中2の職業・家庭科と作業学習を計画的に配列して学習を進めることとした。(図5)

全校授業研究会(11月実施)の前に作業学習の時間をまとめ取りして作業学習を中心に学習をするパワーアップ週間(7日間実施)があったため、そこでの学びと職業・家庭科の授業とをつないでいけるように考えた。

中2の生徒たちは、高等部主事や進路指導主事の話の聞いたり、実際に高等部の先輩が作業をしている様子を見学したりすることで、「無駄な話をしないで集中している」「言葉遣いが丁寧である」など今の自分と比べながら考えることができた。それらの気付きは、中学部が作業前に確認している「作業学習5箇条」の項目と類似している部分が多かったため、「作業学習の5箇条」を見直すこととした。生徒にとって分かりやすい端的な言葉で五つを決め、下位項目に具体的な様子を付け加えて作成した。(図6)

新たに作業学習の5箇条を見直して提示したことで、生徒は5箇条の中から作業の態度面の目標を立て、目標を意識して作業に取り組む様子が見られた。また、作業だけでなく、日々の生活にもつながっており、5箇条を大切に生活することを伝えると、身だしなみを整えたり、時間を守ったりするなど、少しずつ日々の生活もよりよくしていこうとする意識が芽生え始めている様子が見られるようになった。

## 中学部と高等部の違いについて ～今の自分にできること～

- 1 **高等部作業学習見学**  
高等部作業学習の様子や作業学習の先輩に質問をしたことから大事なことを知る。
- 2 **高等部主事の話と高等部見学**  
講話を聞き、気付いたことをメモしたりワークシートにまとめたりする。
- 3 **パワーアップ週間の目標設定**  
高等部の学習の様子を振り返り、中学部作業学習5箇条の内容が分かる。
- 4 **パワーアップ週間**  
自分が決めた目標を意識しながら作業学習に向かう。
- 5 **高等部校内実習の見学  
進路指導主事の話**  
校内実習の内容や実習に向かう態度など、中学部パワーアップ週間との違いに気付き、グループごとにまとめる。
- 6 **これからの自分**  
自分の作業の様子とこれまでの高等部の見学等の学習の様子を比べ、グループで話し合い中学部と高等部の違いに気付く。  
まとめたことを参考にこれからの自分の生活についての目標を決める。

【図5 中2単元計画】

## 中学部作業学習の5箇条

- 1 **あいさつ・返事・ていねいな言葉遣いをする。**  
  - ・自分からあいさつ
  - ・相手に聞こえる声ではっきり
  - ・相手の顔を見て、相手の前に行って、止まって話す
  - 「できました、見てください」「わかりません、教えてください」「～です」「～ます」「～ですか」
- 2 **身だしなみを整える。**  
  - ・鏡を見て、身だしなみを整える
  - ・ベルト、上着の裾、襟元の確認
  - ・ハンカチ、ティッシュの確認
  - ・爪の長さ
- 3 **時間を守る。**  
  - ・約束の時間を守る
  - ・時計をよく見て時間に遅れない
  - ・5分前行動を心がける
  - ・タイマーなどの合図で、次の活動に取り組む
  - ・働くとき、休むときにメリハリを付ける
- 4 **集中して最後まで仕事をする。**  
  - ・自分の役割が分かり、集中する
  - ・作業中は話をしない
  - ・作業場から離れない
  - ・目標の数をやる
  - ・時間になるまで作業をする
  - ・休憩時間はゆっくり休む
- 5 **素直な態度。**  
  - ・「ありがとうございます」「間違えました、すみません」「わかりました」
  - ・話をする人の方を見て聞く
  - ・教師からの言葉掛けや話を素直に受け入れる
  - ・質問に対してすぐに答える

【図6 中学部作業学習の5箇条】

## 5 まとめ

### (1) 生徒の学びをつなぐ授業づくり

授業づくりでは、他学部の教師や栄養士など専門的な知識をもつ人材を活用し、生徒の興味・関心や学ぶ意欲の向上につながった。特に今の自分の生活を考える上では、身近な高等部の先輩や高等部の学習内容を調べることで、自分たちもあのような先輩になりたい、そのために〇〇を頑張るなど考えることにつながり、今できることが将来につながっているものとして考えられるようになってきた。また、生徒の実態から課題と思われる部分や身に付けて欲しいと考える部分を授業内容に設定し、家庭と連携しながら取り組んだ。学んだことをまとめて教室や廊下に掲示し、振り返ったり他学年の生徒や教師が見たりする機会になったことも学びをつなぐ上では効果的だった。さらに、「未来へのスケッチ」の様式を変更し保護者と連携や情報を共有できたこともよかった。

### (2) 生徒の変容

話し合い活動をする、調べたことをまとめる、調べたことを基に実際に体験をするなどの活動を通して、お互いを認め合う、相手を知る、自分のできることや課題、弱みを知って受け入れなどのことができるようになってきた。生徒の実態からも机上の学習だけでなく、体験を重視して学ぶことで、できたときの達成感や満足感、逆にできなかったからどうしたらよいか考えるなど主体的に学ぶ姿につながったと考える。また、「未来へのスケッチ」を活用することで、目標や夢について自分ごととして考えられるようになってきた。そして、そのために何を頑張るのかについて学校と家庭で分けて目標を記入することで、今の自分ができることを記入することにつながった。家庭の中での役割を考えたり、学校で習ったことを家庭でも実践しようとしたりするなど、家庭での取組や過ごし方を考え直すきっかけになった。

### (3) 教師の関わり方の変容

職業・家庭科の教科としてのねらいを考え、生徒の学びのつながりを意識して関わるようになった。中学部に入学したばかりの1年生は学校生活に慣れるために様々な授業とつなげて学ぶことで学習効果が上がるが、2、3年生の場合は、職業分野は作業学習や日常生活とリンクさせながら指導すること、家庭分野は生活単元学習と関連付けて指導すると授業を組み立てやすいことなどに気付くことができた。また、「未来へのスケッチ」を記入して終わりではなく、日々の学校生活や家庭生活と結び付けていくことの重要性について、生徒に気付かせるように指導、支援をするようになった。

### (4) 今後に向けて

今年度は職業・家庭科の「学習内容参考一覧」を基に授業を立案した。大枠が決められており、授業を計画する際には参考になったが、生徒の実態や指導したい内容を照らし合わせると学習内容が計画どおりに進まないことがあった。また、教科として何を学ぶかどのように学ぶかと考えた場合に、他教科と関連付けて指導することの大切さや、学年の身に付けさせたい力を明確に示した上で指導内容や授業を構成していく必要性を感じた。そこで、中学部1年



【図7 中学部 身に付けさせたい力】

から3年の生徒の実態から身に付けさせたい力を検討してまとめた。(図7) 中学部の基盤として自己理解を育み、日常生活とのつながりを大切にして進めたいと考える。自己理解や他者理解は他者との協働学習や体験で育まれるものであり、知識を積み重ねる職業・家庭科を展開するだけでなく、生活単元学習も大事にしながら授業づくりを展開したい。また、等身大の自分を知り、生徒の得意なこと、よさを伸ばしつつ、少し苦手な部分を補っていけるように指導・支援をしていきたい。

## 【資料】生徒の変容のまとめ

### <授業を通して得られたエピソード> 対象生徒 中学部 2年

3人ずつの4グループでの活動が多い。調理や高等部についての調べ学習ではグループのリーダーとして話しを進めてまとめることが多い。1学期は、話し合いの進め方が分からず自分が思っているように進めることができなくなると泣き出したり、小さい声ではあるが暴言を吐いたりすることがあった。そこで、話し合いの内容を具体的に「〇〇と〇〇について話し合ってください」と例を出したり、難しいことは教師に聞き、手伝ってもらってもいいことを伝えたりした。前単元で「バランスのよい食事作り」のレシピを決める際はグループの友達に作りたい物を聞いて、調理時間や材料などから話し合って決めた。また、グループでも分からないことを教師に聞き、教師がグループで考えられるような言葉掛けをすることで、「そっか。じゃあ、～だから～する？」など友達と折り合いを付けて話し合いを進めるようになった。また、本時のまとめで発表する機会を設けることで、発表の仕方が分かり、自信をもって大きい声で話すことが多くなった。

成功経験を積んだり、うまくいかない時でも教師と一緒にどうしたらいいか考えたりすることで、初めての学習や体験に苦手意識をもつことが少なくなり、グループでの話し合いや制作活動で自分から声を掛けて進めようとするようになった。



### <授業以外や関連して得られたエピソード>

学校生活 (関連した教科など)	家庭生活など	地域での余暇活動 など
<p>数学で難しい課題で分からないところを教師に伝えられるようになり、友達にも解き方を聞くようになった。そして、重さを量る学習を通して、調理の際には、率先して材料の分量を量った。</p> <p>全校縦割りの活動や総合的な学習の時間での小学部3年生との交流会では、小学部の児童にやさしくゲームのやり方を教えるなど面倒見がいい一面がみられた。また、中学部1年生の友達に学校のことを自分から教える場面が見られた。</p>	<p>妹が修学旅行に行き、寂しいと担任に話す。次の日には、帰ってきたことやおみやげをもらって嬉しかったと教えてくれた。</p> <p>家庭では小学校2年生の妹の宿題を見て、どうしたらうまく教えられるかなど自分が難しいと感じたことを教師に相談するようになってきた。</p>	<p>家の中で過ごすことが多かったが、新しい友達ができ、地元の花火大会に家族や友達と一緒に出かけたり、小中の特別支援学級やゆり支援学校、福祉事業所合同のなかよし運動会に参加したりして楽しんだ。</p>

# 高等部

## 1 はじめに

今年度30名が入学し、高等部過去最高の61人が在籍している。生徒の実態として、障害が多様化しており、発達障害を併せもつ生徒が増えてきた。自己理解が不十分、経験不足によって物事のイメージをもつことが苦手、自信の無さから行動できないなどの実態をもつ生徒が多い。また、由利本荘地区の中学校から入学してきた生徒については、集団での生活が希薄だったことから、集団でのルールについての意識が低かったり、不適切な関わりからトラブルになったりする生徒もいる。

このような実態を踏まえ、自己理解を深め、学んだことを実践したり経験を積み重ねたりすることで、できることが増え、自信をもって取り組める生徒を育てたい、そして、生活の中で生かせる知識・技能の定着により、卒業後の社会生活につながる力をつけるために自分の課題に向かって努力する生徒を育てたいと考え、「卒業後の社会生活を見据えた『学びをつなぐ』授業実践」に取り組んだ。高等部の今年度の研究のゴールは以下のとおりである。

- ①地域資源（人材、施設又は場）を活用した授業を実践し、卒業後の社会生活に生かせるようにする。
- ②実践的・発展的な学習を行い、学んだことを定着させる。
- ③他教科との関連付けや家庭・寄宿舎との連携を図り、汎化できるようにする。

**高等部の取り組みの実際【職業科】**

**実態に応じたグループ学習**

Iグループ：一般就労を目指す

IIグループ：福祉的就労または一般就労を目指す

IIIグループ：各種福祉サービスを利用しながら地域生活を送ることを目指す

【1年】  
学年全体で

【2年】  
I・IIグループ

【3年】  
I・II・IIIグループ

【図1 学習グループについて】

## 2 授業デザインミーティングの実施

対象授業 高等部3年職業科IIグループ 「卒業後に生かせる施設を知ろう」

### ＜授業デザインミーティング5月（出されたアイディア）＞

- ・マップは、自分の地域を調べることが良いのではないかと。
- ・マップの中にQRコードを載せ、情報を読み取れば良い。
- ・生徒の実態や課題を踏まえた学習内容の設定やゴールを示す。
- ・実際にマップを活用できるか試す場面を設定する。
- ・卒業後「〇〇したい」という本人の願いが大事である。
- ・楽しいこと、余暇をするためには働いて稼ぐにつながることを知る。
- ・お金のかからない余暇の場を見付ける。
- ・教師の余暇を紹介し、様々な休日の過ごし方があることを知ったり、興味・関心をもったりできる場を設ける。
- ・体験的な活動を通して学べる工夫をする。

子どもの思いや願い(自主活動の視点も含む) ・友達との会話を増やしたい、自分の気持ちや考えを伝えたい。(コミュニケーション) ・報告・連絡・相談を自分からできるようにしたい。(人間関係の形成、コミュニケーション) ・立派な社会人になりたい。(心構え的な変化) ・分からないときに自分から確認できるようにしたい。(人間関係の形成、コミュニケーション) 学習グループ全体でやりたい事、教師の思いや願い ・自分で調べたことや自分の思いを自ら発表する事。 ・学んだことを実際の生活の中で活用できる事を伸ばしたい。 ・挨拶や返事など卒業後の社会生活で大切なことが分り、日々の生活で実践する事。	教師の考え(予定) ・自分の考えや調べたことをまとめやすくするためのワークシートを活用する。 ・自分たちで調べながら課題を解決していく学習を中心に、教師が教えながら進めていく学習も実施し、相互に相手を助けて学習を進める。 ・生活面や実用面から学べることをスキルアップするために具体的な実践や体験を取り入れる。 ・考えたり調べたりすることが等身な生徒のために、具体的に考えたりすることができるよう資料を準備したり、調べたりするヒントを提示したりする。 ・自分の考えや思いを発表することから、グループ全体での話し合い活動へと発展させていく。
実際の単元計画 ○オリエンテーション ○卒業後に生かせる施設を知ろうI (卒業後の生活に役立つマップの作成) ○実習に向けて ○実習を振り返る(実習の振り返り) ○卒業後に生かせる施設を知ろうII (卒業後の生活に役立つマップの作成) ○立派な社会人になるために	教師の視点から ・卒業後、悩みを相談できる関係づくり ・学校で社会のルールを学ぶ(規範意識) ・基本的な生活習慣の確立 ・自立した生活を送るための知識、技能の習得
授業の工夫(その他) ・生徒が主体的に関わる学習ができるように、タブレット端末を利用する。 ・伝える力を伸ばすために、日常の社会生活で深く関わりのある施設や、公共交通機関などを一人がチームごとに調べ、発表する機会を設ける。 ・実習の場面を想定したロールプレイや実際に体験する場を設ける。 ・実習と口頭がりを考慮する。	関連する教科等(内容を含む) ・国語、数学、日常生活の指導、生活単元学習、作業学習、実習、家庭

【図2 授業デザインシート】

### ＜授業デザインミーティング8月（話題になった内容）＞

- ・卒業後を見据え、友達や家族と利用したい気持ちを高め、利用できるように施設を増やしたい。
- ・実態差があるグループであるが、ペアリングを工夫し、教え合いながらタブレット端末で施設を一人で調べられるようになってほしい。
- ・身に付けたい力を保護者も学校も明確にし、様々な経験を積み重ねられるようにしたい。
- ・地域にある施設を自宅近くから調べ、範囲を広げて「行きたい、やってみよう」と思う場所が出てくれば嬉しい。
- ・小学部、中学部の段階では、卒業後の地域生活につなげていけるよう、公共交通機関の利用、食事メニューを自分で選ぶ等の経験・活動を段階的に積み重ねていきたい。


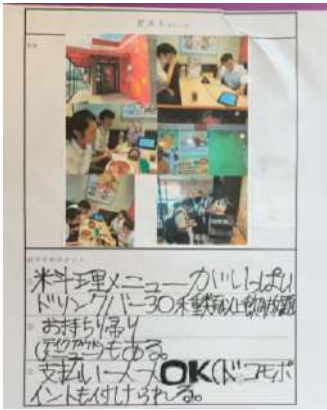


### 3 授業の実際

～高等部3年職業科Ⅱグループ 卒業後に生かせる施設を知ろう（全校授業研究会：10月）～

#### (1) 学びをつなぐための授業のしかけと生徒の様子

高3の職業科の授業では、卒業後に利用できる施設を知り、自宅から行ける施設や場所を知ること、休日などに家族や友達と利用できるようになってほしいという教師の願いから授業を行った。学びをつなぐための授業のしかけと生徒の様子は以下のとおりである。

<授業のしかけ>	<生徒の様子>
<p><b>ワークシートの工夫</b> 自分の考えや調べたことをまとめやすくするために「どこへ」「だれと」「なにをしに」「なにで」など項目を細分化にしてワークシートを活用した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>項目を細かく分けたことで、休日にやりたいことに友達の発表を取り入れたり、自分の行きたい場所、やりたいことを優先して記入したりなど、主体的に考える姿が見られた。</li> </ul> <div data-bbox="1018 488 1423 851" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">☆ミッション☆</p> <p style="text-align: center;">今回の“おすすめポイント”を参考に、休日のお出かけ計画を立ててみよう！</p> <p>①どこに出かけますか？ _____</p> <p>②だれとでかけますか？ _____</p> <p>③なにをしたいですか？ _____</p> <p>④なにで行きますか？（交通手段など） _____</p> <p>⑤何を持って行きますか？ _____</p> </div>
<p><b>個別の活動からペアでの活動へ</b> 自分の考えを話し合いに生かすために、個別の活動からペアでの活動を設定した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>個別に自分の考えや調べたことをワークシートにまとめた後で、ペアで話し合いをしたことで、お互いが積極的に発言し合ったり、相手の意見を尊重したりしながら話し合いを進めることができた。</li> </ul> <div data-bbox="1107 878 1423 1084" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  </div>
<p><b>自分たちで撮影した写真の活用</b> 校外学習での実際の経験を発表活動やスケジュールを立てる活動に生かすために写真などを使った振り返り活動を設定した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発表資料の作成や発表の際に、実際に校外学習で経験した場面や自分たちで気付いたところを撮影した写真で振り返りながら資料の作成や発表をしたことで、自分たちの伝えたいおすすめポイントを具体的に表現できる発表になった。</li> <li>振り返りで使用した写真を使った発表を聞いたことで、実際に経験したことを思い出し、休日のスケジュールとして生かすことができた。</li> </ul> <div data-bbox="1098 1133 1426 1541" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  </div>
<p><b>ICTの活用</b> 一人一人の考えを共有することができるように教師の例示や生徒の発表場面でICTを活用した。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>検索やスケジュールを立てるためのアプリの使い方を大型モニターを使って教師が例示したことで、自分からアプリを使いスケジュールを立てたり、発表の際の言葉を選ぶために検索をしたりする姿が見られた。</li> <li>生徒の記入したワークシートを大型モニターに表示しながら発表をしたことで、友達の意見のよかったところを取り入れるなど、一人一人の意見を全員で共有できていた。</li> </ul> <div data-bbox="1043 1610 1423 1850" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  </div>

## (2) 授業研究会の様子

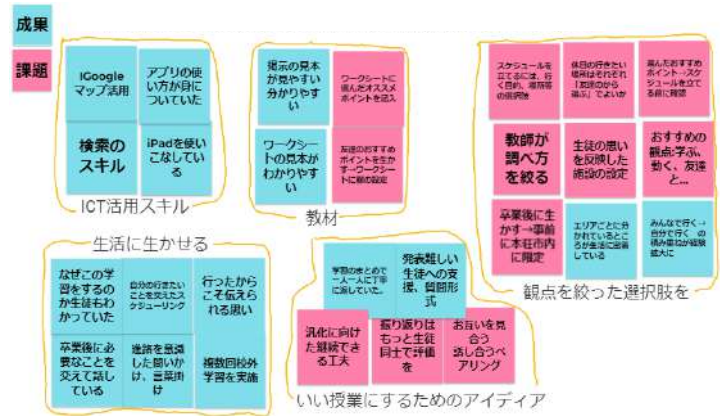
授業研究会では、「単元の学びを卒業後の生活に生かせるようにするための手立てや支援の工夫」で協議を進めた。

### <協議で話題になった主な内容>

- Google マップを効果的に活用していた、家庭生活の充実に向けて地域の施設を知る学習は効果的である。
- 金銭感覚と余暇のバランスを考える。
- 今回のスケジュールを実際に試し、気付いたことを共有する。


### <今後に向けて挙げられた内容>

- 授業の中で動きのある活動内容や、活動量の確保をする。
- ワークシートのさらなる工夫をする。
- 教師とのやりとりだけでなく、生徒同士のやりとりや評価ができる授業展開の工夫をする。
- より具体的な想定（場所の近さ、道順、金銭）で計画をして実際に行ってみる。
- 家庭と連携、情報共有し、実際に過ごした休日の紹介をしてみる。



【図6】研究会でまとめたジャムボード

## (3) 授業研究会後の授業実践と成果・課題

<授業のしかけ>	<○成果、▲課題>
<p><b>繰り返しの活動</b> 一回目の校外学習の経験を生かした二回目の校外学習の実施</p>	<p>○一回目は教師側である程度のスケジュールを提示したが、二回目は自分たちで施設のことを調べ、地図検索アプリを使って学習するコースを決めるなど、主体性のある活動に繋がった。</p> 
<p><b>相手を意識したまとめ</b> 自分たち以外の人たちへの情報提供のためのワークシート作成の工夫</p>	<p>○まとめのワークシートに記入する内容を厳選したことで、分かったことをどのようにワークシートにまとめるかという部分でペアでの話し合いが深まった。また、おすすめポイントを簡潔にまとめたり、写真を使用したりして、「相手に伝える」ということを意識してワークシートを作成する姿が見られた。</p>
<p><b>家庭で生かす場面の設定</b> 休日の施設利用や買い物などを自分で計画し、実際に一人または友達、家族と一緒にいることができるような週末課題等の設定</p>	<p>▲普段から一人で出掛けている生徒は、自分で計画して施設利用や買い物などを実施できたが、移動などで家族の協力が必要な生徒は、計画しても実施が難しいなど、生徒の置かれている環境によって実施にばらつきが見られた。</p>

### 3 キャリアノート「未来へのスケッチ」の検討や活用

高等部ではキャリア教育推進委員会より提案された様式のシートを使用し、1年生は前期と後期、2・3年生は学期ごとに記入した。日々の生活で目標を意識し、自己理解を深めたり、自分の成長を実感したりできるように、各学年で工夫しながら活用した。

#### ＜高等部 「未来へのスケッチ」活用方法：高等部2年の実践＞

##### 【1学期】

- ①「未来の夢や目標」から、本人が課題と感じていること、一人暮らしがしたいという目標を意識して、家庭生活の目標を本人が考えた。生徒と担任での面談、1年時の作業や実習での課題点、家庭からの聞き取りを基にして、具体的な目標を設定した。
- ②I期現場実習（6月）で、「未来へのスケッチ」とリンクした実習目標を設定した。振り返りでは、今後の課題として『朝の起床時間』について記入した。（図3）

##### 【2学期】

- ③実習での反省点を日常生活で改善するように言葉を掛け、本人に意識付けをすることで、2学期も自分の課題を意識した目標を設定し、II期現場実習（11月）にも繋がった。起床時間を守って路線バスで通勤した。（図4、5）

課題を意識して目標を立てたことが、生活や行動の改善へと繋がった。本人が意識して行動したことで、目標を達成し、成長を実感した。

##### 【家庭との連携ツール】

1年時は米研ぎや風呂掃除といった家庭での役割を目標にし、現在も継続して取り組んでいる。将来の夢を意識して自分で立てた目標について、スモールステップで取組を重ねたことで、自信ができてきた。

2年時の目標に『できていないこと』をできるようにと記入した生徒の思いから、課題に向き合う準備ができたことが伺えた。

目標を達成するためには、家庭からの協力が必要であることから、「家庭で取り組むことの必要性」を面談等で伝えながら、継続して取り組むことへのサポートをお願いした。

学校と家庭、本人が同じ考えをもつことで、本人の大きな成長に繋がり、様々な場面で自信をもって行動する場面が増えた。

### 5 まとめ

#### （1）生徒の学びをつなぐ

生徒たちの思い・願いを生かしながら、3年IグループはE-サポート見学・相談、地域施設の利用、手話教室、救命講習会、3年IIグループは、地域施設の利用について、地域資源を活用した授業づくりを行った。地域資源を活用し、卒業後の生活につなげる授業実践に取り組んだことで、「卒業後も利用したい」「専門的なことを知れたので、卒業後も生かしたい」と、生徒自身も卒業後に生かせる知識・技能を身に付けることができた。

実習先は NPO法人 あゆみの会 でした。

○目標は  
 ① 話をよく聞いて作業に緊張を持って取り組む。  
 ② 周りの気配を敏感に察知する。 でした。

○成長したこと：できるようになったこと 自信がついたこと  
 ① 話しを聴くときに目を見て話せるようになった。  
 ② 自分の思ったことをすぐ言葉に出せること。  
 ③ 時間によろしく待って通勤できるようになった。

○II期の実習に向けて頑張りたいことは、  
 ① いろいろな人に声をかけられるように。  
 ② 自分から周りの人に声をかけるものがほしいです。  
 1年生、2年生、3年生 先生

① 身支度を整え、自分の起床時間の30分前に起床。  
 ② 毎日決まった時間に起床。  
 ③ 遅くとも、

【図3 I期現場実習後の振り返りシート】

未来の夢や目標  
 ① 将来の夢や目標を具体的に書き出し、達成するために必要なことを書き出す。  
 ② 達成するために必要なことを書き出す。  
 ③ 達成するために必要なことを書き出す。

未来へのスケッチ  
 高等部  
 年 組 名 前

家庭や地域で挑戦すること（手洗いや掃除など）  
 ① 早起きができるようにする。  
 ② 洗濯物を干す、掃除機をかける。

挑戦してほしいこと  
 ① 一人でできる作業を一緒にやってほしい。

【図4 2学期の目標】

実習先は 障害者自立支援センター でした。

○目標は  
 ① 作業の手を止めずに最後まで集中。  
 ② 時間：間休をうまく活用する。 でした。

○目標が達成できるように工夫し、～することができました。  
 △目標が達成できるように取り組まましたが～が難しかったです。

目標の達成できるように、作業を早く始めて、毎日バスに乗り通勤することができました。でも、もう一つの目標は、作業中、無気力な状態がなかなか取れず、目が眩み、体が疲れてきて、大変でした。

【図5 II期現場実習の目標】

学校生活全体に学びをつなげることができるように、「未来へのスケッチ」を活用した。学校生活で目標を意識して行動できるように、全学年、「未来へのスケッチ」を教室に掲示し、1年生は、朝の会で日直が目標と支援してほしいことを発表し、帰りの会では自己評価、他者評価を繰り返した。2・3年生は、他教科や日常生活に学びをつなげるために、校内・現場実習の事前・事後学習を核とし、実習の課題を「未来へのスケッチ」の目標にし、日常生活に結び付ける授業づくりを行った。実習の振り返りの時間を大切にしながら自己理解を深めたことで、日々の生活が卒業後の生活につながることを自覚し、生徒自身が「未来へのスケッチ」の目標を設定し、自分の課題を意識して生活する姿が見られた。

## (2) 生徒の変容

「未来へのスケッチ」を目標設定や振り返りをするためのツールとし、夢や希望を叶えるために努力し、今のがんばりが卒業後につながることを実感できるようになった生徒が増えた。自分の課題を自分事として取り組む生徒が増え、できないことを自分で受け入れながら目標を設定し、できるようになった自分へ自信をもって様々な場面で積極的に取り組む生徒が見られた。

話合いや伝え合いなど、生徒主体の学び合いの場を積み重ねたことで、生徒同士の学び合いから学ぶ・自分事として生かす場面が見られた。Ⅰグループは、個々の学びをグループディスカッションで共有することで生徒自身の考え方・見方が拡大した。Ⅱグループは、友達の意見を自分事として捉えながら生活に生かしていこうとする姿が見られた。

## (3) 教員の関わり方の変容

【表1】高等部教員に対する授業づくりアンケート結果 ～一部抜粋～

項目	平均値		増減
	6月	12月	
教師は、児童生徒が学びをつなぐための支援を工夫している	2.96	3.38	+0.42
児童生徒は、学んだことを次の学習に生かしている	2.88	3.34	+0.47
未来へのスケッチを効果的に活用し、生徒の願いや思い、目標やがんばりたいことを生徒、教師間や保護者などと共有している	2.67	3.19	+0.52
未来へのスケッチを活用し、目標やがんばりたいことの評価や振り返りをしている(生徒、教師間や保護者など)	2.77	3.38	+0.61

※評価基準 4：よくしている 3：ときどきしている 2：あまりしていない 1：ほとんどしていない

学びの定着から汎化へつなげる授業づくり(例：自己理解を深める、必要感を感じることができる題材の設定、個に迫る進路指導、主体的な進路選択、体験活動の充実、自分の取組を相手に伝える機会の設定等)の意識が高まり、卒業後の社会生活を見据えた『学びをつなぐ』授業実践ができた。

「未来へのスケッチ」の効果的な活用方法についても各学年で工夫が見られた。定期的な評価、生徒同士で目標を共有、外部評価を取り入れる、即時評価、教室掲示、帰りの会で振り返り、作業担当教員間の共通理解ツールとしての活用等、日常生活での活用、生徒の自己理解・進路決定につながる活用、情報共有ツールとしての活用などの工夫をしたことで、生徒自身が成長を実感し、目標を意識した言動ができるようになった。

## (4) 今後に向けて

「未来へのスケッチ」については、校内での活用については成果が見られたが、家庭や寄宿舎との連携ツールとしての活用が十分にできなかった。生活全体でさらに効果的に学びをつなげられるよう、個別の教育支援計画・指導計画と関連性・整合性をもたせたり、生活面について家庭や寄宿舎と共有したりする機会を設ける等、連携ツールとしての活用方法を工夫しながら生活の場への汎化につなげたい。

生徒の課題や目標・願いについて、所属学年以外の生徒については分からないという教員も多かった。「未来へのスケッチ」や、実習の評価表、巡回記録について高等部教員全員に回覧したり、見合う時間を設けたりしながら学部全体で情報共有を図り、授業実践に生かしていけるような工夫をしていきたい。

【資料】生徒の変容のまとめ

<授業を通して得られたエピソード> 対象生徒 高等部3年

【「未来へのスケッチ」の目標】

未来の夢や目標 『りっぱな社会人になる。』

1年間の目標 [学校での学習] 作業学習で働く力を高めたい。

[学校生活] 相手の話しかけるタイミングを身に付ける。  
簡単に説明できるようになる。

[家庭や地域] 漢字の練習をする。

【職業科でのエピソード（職業Ⅱグループ）】

- ・ワークシートの2行の枠内に簡潔に文章をまとめられるようになった。
- ・授業開始時刻を意識し、必要なものの準備を手伝うようになった。また、分からないときは教師に質問するようになった。
- ・地図検索アプリの使い方を覚え、活用できるようになった。
- ・普段関わりの少ない人と話し、成果と課題を振り返ることで、コミュニケーションスキルが向上した。
- ・自分の日々の出来事だけでなく、世間の出来事をニュースなどから見て学び、会話に生かせるようになった。



<授業以外や関連して得られたエピソード>

学校生活 (関連した教科など)	家庭生活など	地域での余暇活動 など
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「未来へのスケッチ」の目標や振り返りなどを自分の思いを整理して簡潔にまとめられるようになった。</li> <li>・自分から教師に質問することが増え、考えて行動するようになった。</li> <li>・活動の準備や後片付けを進んで行うようになった。</li> <li>・友達や教師からの意見や指導を素直に受け入れる力が付いた。</li> <li>・友達との距離感に課題があったが、相手のことを考えながら会話をするようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・電気シェーバーを使用した毎日のひげ剃りが日課となった。</li> <li>・家族の一員として、畑の手入れや力仕事を率先して行うようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・休日に福祉事業所の学習会へ誘われ、自主的に参加した。</li> <li>・校外学習で訪れた体育館へ一緒に体を動かそうと友達を誘った。</li> </ul>



# 寄 宿 舎

## 1 はじめに

今年度は、男子7名、女子9名の計16名でスタートした。男子2名、女子1名が途中入舎し、現在は、中学部、高等部の19名が在舎している。

寄宿舍に入舎する生徒の多くは、生活全般において経験が不足しており、何ができるのかや、得意なこと、苦手なこと等についての自己理解が難しい傾向がある。また、周囲との関わりが限られていることが多く、「相手の立場や気持ちを考えることが苦手」「自分中心な考え方になりがち」「声をかけてもらったり、やってもらうことを待っていたりする」という傾向がある。周囲からの理解を得られにくい環境で、失敗したり、注意されたりすることの積み重ねから、自己肯定感が低い生徒も散見される。

寄宿舍に入舎し、同年代の友達との生活を通して、自身の身の回りに関することや、掃除、洗濯などの経験を重ねることで、できることや周囲から認められる経験が増えてくると、意欲の高まりや自信をもって行動する姿、積極的に周囲と関わる姿が多く見られるようになってくる。

生徒が学びをつなぎ、身に付けた力を生活の中で生かすこと、家庭生活につながるように、生徒の思いや願いを大切にしながら、互いに学び合える生活指導を目指したいと考えた。

寄宿舍の今年度の研究のゴールは以下のとおりである。

- ① 日常の生活指導グループを中心とした生活指導を『学びをつなぐ視点』で検証・改善する。
- ② 舎生が学びをつないで、卒業後の生活に必要な力を身に付け、その力を生かして生活する環境づくりと場面設定を行う。

## 2 寄宿舍の生活指導について

寄宿舍の生活指導は、日常の生活指導グループを中心とする生活指導とおおぞらシート（自分の将来の目標に向けて今何をしなければならぬのかを考え、取組の過程を記入するシート）を活用した個別の生活指導計画が柱となっている。

### 日常の生活指導グループを中心とする生活指導

「食事・健康管理」「入浴・身なり・洗濯」「清掃・整理整頓」の3グループで基本的な生活習慣の習得と定着を目指している。毎月、日常の生活指導に関するミーティングを実施し、指導内容について共通理解を図るとともに、勉強会等の内容や生徒個々の生活指導上の課題等について話し合いを行っている。生活に関する知識やスキルの向上のため、各グループ年2回（前期・後期）の勉強会を実施している。

### おおぞらシートを活用した個別の生活指導計画

「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」との関連性を考慮し、おおぞらシートや面談から本人及び保護者の思いや願いを受けて、段階を踏まえた目標を設定している。職員間で指導方法の共通理解を図り、本人・保護者のニーズに応じた指導を行っている。

生徒は、年度当初におおぞらシートに将来の生活でできるようになりたいことを記入し、セルフチェックシートで現在の状況を職員と確認して、できるようになるための目標を考える。目標の達成に向けての取組は前・後期、長期休業前後に確認・記入して、保護者と確認し、長期休業中の家庭での取組につなげている。

## 3 生活指導の実際

### (1) 日常の生活指導グループを中心とする生活指導

#### ① テキストブック(分からないことを調べたり、見て確かめたりするためのツール)の活用

昨年度、生活の中で、分からないときや困ったときに生徒自身が確認したり、調べたりできるように日常生活の知識や技術をわかりやすくまとめたテキストブックを作成し、今年度より生徒が手元に置いて活用できるようにしている。

前期の反省として、日々の生活や個別指導での活用が不十分だということが挙げられた。後期は、指導グループの話合いでテキストブックを基に検討したり、非常勤職員との指導方法の確認、共有に活用したりするなど、日々の指導や勉強会に職員が活用する機会を増やした。

また、生徒のテキストブックを基に勉強会を計画することで、日々の指導や事後指導での生徒の活用につながった。

寄宿舎以外での活用に向け、ホームページ、たより等で保護者にテキストブックを紹介する機会をもった。

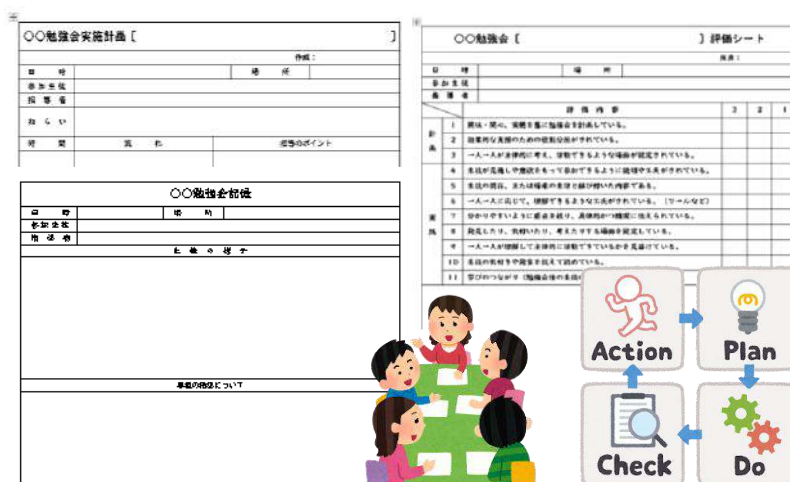


## ② 生徒が主体的に学ぶ勉強会の計画・実施、改善

昨年度、職員用の勉強会評価シートを作成し、勉強会実施後に指導内容を評価し、改善につなげることができた。

今年度は、実施計画や記録の様式も合わせて見直し、指導内容や生徒の変容を共有して勉強会を実施した。勉強会後の評価、改善・充実につながった。

実施計画を立てる際、事前のアンケートから、生徒が興味をもっていること、知りたいと思っていることを聞き取った。体



験的な活動、視覚的に工夫した教材の活用、生徒が手本を見せたり、教え合ったりする場面を設定するなど、意欲を引き出す様々な仕掛けを工夫した。後期は、「何のために必要なのか」「何ができるように」などめあてを明確にし、生徒が興味や関心をもっている生活に必要な内容で計画できたことで、生徒の主体的な参加につながったと考える。

勉強会後は、活動記録で生徒の様子について共有し、それを基に学んだことが実際の生活に反映するように、事後指導を検討したり、次回の勉強会の計画を立てたりした。


計画・記録・評価の流れを明確にすることで、勉強会で指導したこと、日々の指導につながりが生まれた。継続した指導ができるようになり、勉強会をきっかけにして、学んだことが定着につながる生徒が見られるようになった。


今年度実施した勉強会は次のとおりである。



<b>掃除の勉強会</b>	7月12日(水)	ポイント：掃除の仕方を教え合う
<p><b>勉強会の内容：掃き掃除、拭き掃除の仕方</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>先輩が見本を見せ、掃除の仕方やポイントを伝えた。</li> <li>見えやすいゴミや、ぞうきんの動かし方をテープで示すなど視覚的に分かりやすい支援を行った。</li> </ul> <p><b>生徒の変容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>掃除の仕方や自分に合ったやり方が分かり、実践できた。</li> <li>長期休業中など、自宅でも手伝いをした。</li> </ul>		




ほうきの持ち方や動かし方を上級生が教えた

<ul style="list-style-type: none"> <li>・共有場所掃除の際に声を掛け合いながら行っていた。</li> <li>・他の場面でも互いに学び合う様子が見られた。</li> </ul> <p><b>成果：掃除の仕方や指導内容の共有ができた</b>  <b>課題：定着や事後指導に向けた実施時期</b>  <b>グループの人数や時間配分の工夫</b></p>		<p>穴開けパンチの ゴミを床にまき、 はき方を練習した</p>
---	--	--

<p><b>汗の処理の勉強会</b></p>	<p>8月30日(木)</p>	<p>ポイント：見て分かる工夫</p>	
<p><b>勉強会の内容：汗の拭き方、衣類の交換</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・テキストブックを活用して確認した。</li> <li>・テスターを使い、汗で汚れた衣類を見て、汗をかきやすい部位や、汗で汚れた衣類を確認した。</li> </ul> <p><b>生徒の変容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・着替えの衣類やタオルを学校に持参したり、外遊びで汗をかいた時に衣類を交換したりする生徒が増えた。</li> </ul> <p><b>成果：普段見えない部分を見えるようにしたことで、清潔への意識が高まった。</b>  <b>課題：様々な場面での応用</b></p>			 <p>汗の始末の仕方はテキストブックで、汗のかきやすい部位は、テスターで汚れを浮き出させたTシャツで確認した</p>

<p><b>洗濯の干し方の勉強会</b></p>	<p>9月6日(水)</p>	<p>ポイント：洗濯物の干し方を教え合う</p>	
<p><b>勉強会の内容：バランスの良い干し方</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・乾きやすいアーチ干しの方法を紹介した</li> <li>・ピンチハンガーなどの使い方、干し方を生徒同士で手本を見せながら考えた。</li> <li>・最後に、クイズで乾きやすい方法を確認した。</li> </ul> <p><b>生徒の変容</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事後に、乾きやすさを意識して干している生徒のピンチハンガーに「いいね」のクリップをつけ、周囲の見本としたことで生徒の意欲が高まり、バランス良く干す生徒が増えた。</li> </ul> <p><b>成果：自分で行っている工夫を確認し合うことで、生徒の意欲が高まった。</b>  <b>課題：時間配分、集中して取り組めるグループ編成。</b></p>			 <p>アーチ干しの手本を見せた</p>  <p>自分の干し方を紹介したり、友達の干し方を見たりして、乾きやすい干し方を考えた</p>

<p><b>体の清潔の勉強会</b></p>	<p>10月30日(木)</p>	<p>ポイント：ICTの活用、見て分かる工夫</p>	
<p><b>勉強会の内容：身だしなみの整え方、鏡の使い方</b> 〔男子〕</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ひげ、髪、襟元・ネクタイの3グループに分かれ、タブレットを使って方法を調べ、用紙に記入、発表した。用紙は事後に掲示した。</li> <li>・前回の勉強会の反省からグループ編成に配慮したことで、集中して取り組んでいた。</li> </ul>			 <p>グループで調べたことを発表した</p>



[女子]

- ・入浴時のすすぎ残しがない流し方について、泡が残りやすい場所にシールを貼り、鏡をどのように使うと見えるかを確認した。

**生徒の変容**

- ・自分で調べたことを発表・掲示することで、方法が具体的にわかり、実際に行うことができた。(男子)
- ・勉強会で確かめた方法を、入浴時にやってみる姿が多く見られた。(女子)

**成果：言葉掛けがなくても整えられるようになった。**

**課題：男女別の内容を互いに活用するための検討**



泡が残りやすい部分にシールを貼り鏡を見て確かめる方法を話し合った

**整理整頓の勉強会**

11月30日(木)

ポイント：自分に合った整え方を考える

**勉強会の内容：机の上や引き出しの整頓**

- ・手本の生徒の机上の写真を見ながら、整頓のポイントを聞く。その後、テキストブックを見ながら整頓の仕方について話し合った。
- ・自分に合った方法を用紙に記入し、「がんばる宣言」として部屋に掲示、机上の整頓を確認する期間を設けた。

**生徒の変容**

- ・整頓の仕方が分かり、知識として身についた。
- ・見本の生徒は自信をもち、やる気につながった。

**成果：勉強会後の指導がスムーズだった。**

**課題：生徒同士の話し合いの場面では、話し合いを深めるための工夫が必要**



友達のやり方を見たり聞いたりして、整理整頓の方法が分かった



整頓の方法を話し合った

**食事のマナー勉強会**

12月6日(水)

ポイント：教材を工夫し、楽しみながら体験する

**勉強会の内容：汗の拭き方、衣類の交換**

- ・パワーポイントを見ながら箸・食器の持ち方、食事の際の姿勢を確認した。
- ・マナー豆を使用し、箸の使い方を練習した。

**生徒の変容**

- ・箸の持ち方を楽しみながら自主的に練習していた。友達や職員と箸でうまくつまむ方法を話し合っていた。
- ・マナーを意識して食事しようとする生徒が見られるようになった。

**成果：楽しみながら学ぶ機会を作った。**

**課題：正しい持ち方と自分の持ち方を比較できるが、実際に正しい持ち方を行うことは困難**



茶碗や箸の持ち方を写真で比較し、手の平より大きなお皿は持たないことを確認した



楽しみながら箸の練習

**(3) 個別の生活指導計画とおおぞらシートのつながりと活用した生活指導**

前・後期の初めに行うセルフチェックシートには、寄宿舎で経験できることを提示している側面があり、生徒は未経験の項目に気づき、興味を持ったり、自分の苦手や得意



セルフチェックシートを記入する様子

を知ったりすることができた。職員は、生徒の自己評価や理解度、本人の認識と実態の差異を確認することができた。セルフチェックシートを活用して生徒と話し合ったことにより、生徒の思いや願いが分かり、おおぞらシートの目標と個別の生活指導計画につながりが見られた。生活の技術的な課題を達成するための目標だけではなく、家庭で役割を持ったり、生活の楽しみにつながったりするような目標が増えた。

自身の目標を意識して生活できるように、おおぞらシートを用いた生徒との対話から、生徒の思いや願いを引き出したり、言葉を補ったりしながら、目標達成のためにできることを考え、振り返りをしながら進めた。取組の過程は、



保護者と確認する機会を持ちながら

長期休業中も継続して取り組んでいる

期間を決めて確認し、長期休業中の家庭での取組につなげている。

#### (4) 身に付けた力を生かす場面と環境作り

##### ① 体験活動を重視した行事の場面

###### 寄宿舎行事（夏祭り、おおぞらパーティー）

実行委員が中心に話し合って計画を立て、得意なことや苦手なことを伝え合いながら、全員で役割分担をして、楽しむために準備をした。

###### 余暇活動（おおぞらグループ活動、部屋活動）

グループの友達と楽しむために、自分達で調べ、話し合いを行い、計画を立てる期間を設定している。楽しみながら調べ、話し合い、互いに伝え合うことを目的とした。

##### ② 日々の生活指導場面

日課の一部は、時間を選べるようにし、生徒自身が優先順位や時間配分を考え、時間に合わせて行動、生活できる環境を整えている。また、互いに気持ちよく生活できるように相手に伝える、相手の話を聞く、友達同士で相談し、話し合いで解決する場面を大切にしている。伝え方や聞く態度などについて、職員がアドバイスしたり、手本を見せたりして友達との関わり方について教えた。

##### ③ 家庭・学部との連携

学部とは、授業での寄宿舎活用や後期に向けて個別の指導の方向性を確認する話し合いをもったことで、互いの指導を知り、つながりをもってすすめることができた。保護者とは、おおぞらシートを活用して帰省帰舎日やPTA等を取組の様子や変容について互いに確認することを続けてきたことで、家庭で役割ができたり、今までやらなかったことを行ったりするという姿につながった。保護者から「家で初めて掃除機をかけてくれた」「朝ご飯におにぎりを作ってくれた」という話が聞かれている。

## 4 まとめ

### (1) 生徒の学びをつなぐ

勉強会の実施計画等の様式を整え、ねらいや指導内容について共有し、指導の充実を図った。また昨年度作成した評価シートの評価項目を見直し、具体的な評価から改善につなげられるようになった。計画・記録・評価の流れを明確にすることで、勉強会で指導したことと日々の指導につながり継続した指導ができるようになった。

勉強会をきっかけにして学んだことが定着する生徒が増えた。勉強会では、個別の目標で身に付けたことを生徒同士が教え合ったり、学び合ったりする姿が見られ、互いの成長につながった。さらに、勉

強会で学んだことが個別の目標達成につながるなど、個別の生活指導と日常の生活指導グループを中心とした生活指導につながりがみられた。

## (2) 生徒の変容

勉強会に興味をもって参加し、主体的に学ぼうとする姿勢が見られるようになってきた。日々の生活の中で、学んだことを基に自分で考えて行ったり、工夫したりする姿が見られるようになってきた。また、自分で考えて生活する環境を整えたことやおおぞらシートを活用した職員との対話から、何ができるようにになりたいか、どうしたらできるようになるか、できるようになったことを続けるにはどうしたらいいかなど、自分事として捉え、取り組めるようになってきた。

生徒同士のコミュニケーションを大切にする指導を続けたことで、生活経験等が異なる友達の様子や会話から自分がこれまで身に付けた方法や習慣の他にも様々な方法があることに気付くなど、他者理解や自己理解につながった。先輩の姿から自分の将来や次に行うことをイメージし、目標を見つけて取り組むなど、見通しをもって生活する場面もみられた。生活の中の実体験からの共感や励まし身に付けた得意なことを教え合うことなど、一緒に生活することから助け合う姿がみられている。助けてもらった生徒は、友達の存在が憧れや意欲につながり、手本の生徒をまねてできるようになる生徒もいた。助けた生徒は、やりとりから自信をもったり、自分の得意な面が分かたりすることで意欲が高まり、自己理解が深まった。その姿は、まさに生徒自身が学びをつなぐ姿であると考えている。

## (3) 指導員の関わり方の変容

勉強会の計画・事後指導について、指導グループでの話し合いが充実し、勉強会には生徒が興味や関心をもって取り組める仕掛けが工夫され、体験的な活動、視覚的に工夫した教材の活用により、意欲的な参加につながった。勉強会後は課題を確認し、生徒の意欲を引き出す工夫や指導方法の改善を行うことで、定着に向けた継続した指導が行われるようになった。おおぞらシートを活用した個別の生活指導では、生徒との対話から思いや願いを聞き取り、目標設定や取組に生かした。目標達成に向けて生徒とじっくり向き合う時間をもっと持てるとよいという課題もあるが、日々の指導では、自分で考えて生活する場面作りや生徒に気付かせるような指導、支援をするようになった。

## (4) 今後に向けて

おおぞらシートを活用した個別の生活指導を始めて4年になる。生徒の思いや願いから、生活の技術的な課題を達成するための目標だけでなく、家庭での役割や、生活の楽しみにつながる目標が増えた。そのことにより、学んだことを家庭生活に生かすことができる生徒がみられるようになった。一方で、話し合いは、充実しているが、目標達成のために行ったことを確認するには、文字が多く、思い出したり、イメージしたりする振り返りに課題があった。学びの履歴を視覚的に分かりやすくするためには、写真や図等を用いた様式や確認する時期の検討が必要と考える。

指導グループを中心とした日常の生活指導では、勉強会の実施計画等の様式を整えたことにより、ねらいや指導内容について共有し、指導の充実が図られた。また、具体的な評価や話し合いから指導方法の改善につなげられるようになった。計画・実践・記録・評価の流れを明確にすることで、勉強会で指導したことと日々の指導につながりが見られ、継続した指導ができるようになった。

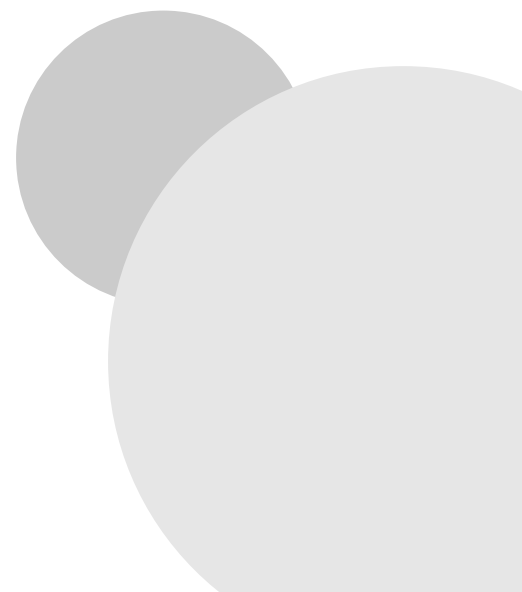
今後も生徒が考えて生活できる環境や互いに気持ちよく生活するために友達同士で相談し、話し合いで解決する場面を大切にしていきたい。

個で身に付けた力が生かされ、互いに学び合い成長できる場面や同年代の友達との集団生活の良さがみられる場面など、寄宿舎の良さに着目し、家庭や学部との連携から家庭生活や社会生活に生かせる生活力を育てていきたい。





## 第3章 研究のまとめ



## 研究のまとめ

### (1) 授業デザインミーティングの実施

授業デザインミーティングは、児童生徒の学びをつないだり、学びがどのようにつながったりしているか様々な視点から検討・協議を行ったものである。今年度は、授業の単元構成や指導計画立案に他学部の見点を取り入れることや、授業実践を通しての児童生徒の変容を見取ることができるように全校縦割りミーティングを合わせて3回実施した。

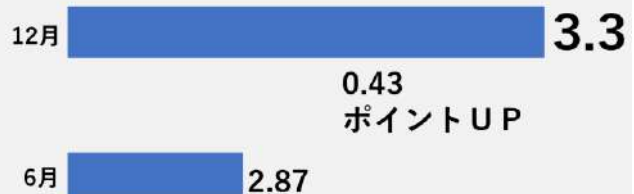
今年度の授業デザインミーティングの主な成果は次のとおりである。

- 授業参観を通して他学部教員からいろいろな意見やアドバイスをもらい、それらを指導計画や単元構成等の見直しや授業改善に生かすことができた。
- 日々の教科等の授業での指導に加え、日常の学校生活を通じた実践を積み重ねることの重要性について再確認することができた。
- 高等部の実践では、卒業後の生徒の働いている姿を考えることで小学部からの指導の一貫性について様々な意見を交換する機会となった。
- 卒業後の生涯学習の観点から、小学部や中学部において何をねらいとして取り組むべきか他学部の教員とともに授業の単元構成や生徒の変容などを共有することができた。

以上のように、全校縦割りミーティングでは、他学部教員から寄せられた様々な意見やアイデア等を授業改善に反映させることができた。また、複数の教員によって児童生徒の学びのつながりを見取ることができ、共通理解を図ることができたことは成果として挙げるができる。

反面、教員のグルーピングに偏りがあったり、授業参観ができなかった教員がいたりしたことは課題として残された。次年度は、グルーピングの工夫や進め方等の改善を図りながら、全校体制で効率的な授業デザインミーティングを実施していきたい。

児童生徒は学んだことを次の学習に生かしている



【教員への授業づくりアンケートから】

※評価基準 4：よくしている 3：ときどきしている  
2：あまりしていない 1：ほとんどしていない

### (2) 「未来へのスケッチ」の活用

今年度は、各学部の児童生徒の状況に応じた「未来へのスケッチ」の様式を変更しながら次のような実践を積み重ねた

#### <小学部>

1、2年生は、自分の夢や目標を設定することが難しい児童もいるため、イラストや写真で児童の好きなことや学んできたことが履歴として残るような様式に変更した。3、4、5年生は児童の実態に合わせて目標に対する自己評価を毎日したり、学期末に家庭から評価をしてもらったりした。6年生は、中学部とのつながりを考慮して、中学部が作成した「レベルアップを目指そう」の項目から目標を設定した。

#### <中学部>

「未来へのスケッチ」の様式を変更し、1か月ごとに目標設定と振り返りを積み重ねたことで、生徒が目標や夢について考えられるようになってきた。今までは目標や夢について漠然と考えていたが、目標や夢を達成するために学校と家庭で分けて記入するようにしたことで、今の自分ができることを具体的に考えて記入することにつながった。家庭での自分の役割を考えたり、学校で習ったことを家庭でも実践しようとしたりするなど、家庭での取組や過ごし方を考え直すきっかけになった。

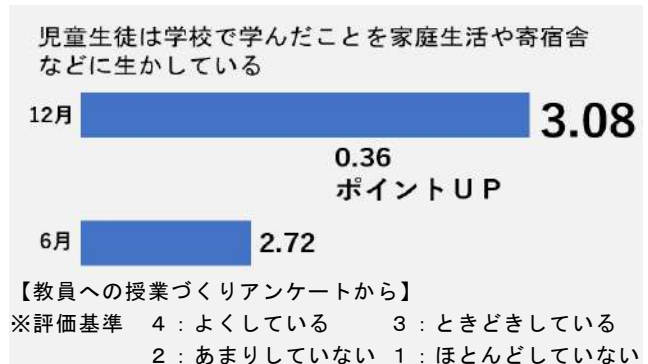
## <高等部>

「未来へのスケッチ」をツールとし、将来の生活を考えることで、夢や希望を叶えるために努力し、今のがんばりが卒業後につながることを実感できるようになった生徒が増えた。また、生徒主体のグループディスカッションの場を積み重ねることで生徒自身の考え方や見方が拡大したり、友達の意見を自分事として捉えながら生活に生かしていこうとしたりする姿が見られた。

このように、各学部とも様式を変更して授業や家庭との連携をしながら活用できるようになってきたことで、児童生徒は自分の目標や夢を達成するために取り組むことを意識して学校や家庭で過ごすように変わってきた。中学部や高等部では生徒自身が自分の目標を設定し、それらの目標を達成できるように努力をしたり、目標の振り返りの中で次にどうしたらいいか考えたりできるようになってきたことは大きな成果である。

これらの取組を通じて、生徒が自分の得意、不得意に気付き、前向きに取り組んだり、将来の進路について考えたりする機会が増え、自己理解につながったり、深めたりすることができるようになってきていると考える。

一方で、「未来へのスケッチ」を授業にもっと活用したい、保護者や寄宿舎と連携したいなどの教員の要望もあり、改善の余地がある。「〇〇をしたい、学びたい、やってみたい」などの児童生徒の思いや願いを大切にしつつ、授業の中に取り入れ、できた、分かったなどの実感や達成感を味わう経験を積み重ね、学びをつないでいくことが教師に求められていると考える。今後も、「未来へのスケッチ」の取組を継続し、児童生徒が夢や目標をもって学校や家庭生活を送ることができるように学びをつなげていきたい。

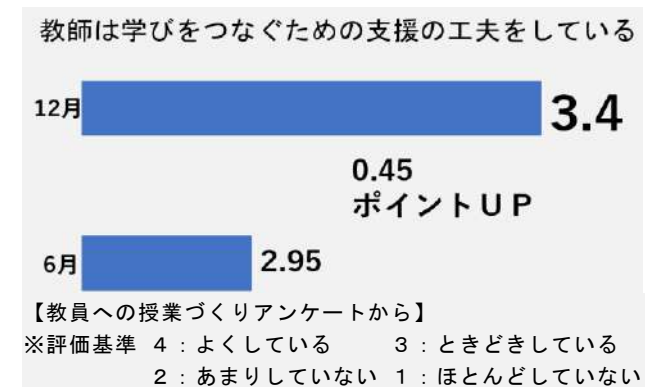


### (3) 児童生徒の学びをつなぐ授業づくり

何を学んだか、どのように学んだかについて生徒自身が考えることができるように、目標設定や評価方法を工夫したり、興味・関心のあるものを取り上げたり、学んだ成果を掲示したりして授業づくりを行った。各学部の取組は以下のとおりである。

#### <小学部>

低学年では、一つの素材から活動内容や学習の展開を工夫することで児童の興味・関心の幅が広がり、楽しい、もっとやりたいという気持ちなどを身近な人へ言葉や身振りなどで伝える姿につながった。高学年では、校内の人材を学習活動の中で効果的に使うことで、児童の技術面が伸びるだけでなく、教師や友達からの評価が自信へとつながり学ぶ意欲の向上へとつながった。



#### <中学部>

他学部の教師や栄養士など校内の専門的な知識をもつ職員から学ぶ場面を設定したことで、生徒がより興味・関心をもち学習することができた。また、自分が学んだ履歴を視覚的に新聞やワークシートにまとめて掲示したり、活動後の振り返りの時間を設定したりすることで、生徒自身が何を学び、今後どのように生活をしていくか考え、学んだことを次につないでいこうとする意識が高まった。

#### <高等部>

自己理解を深められるように振り返りの時間を積み重ねたことで、日々の生活が卒業後の生活につ

ながることを自覚し、生徒自身が「未来へのスケッチ」の目標を設定し、自分の課題を意識して生活する姿が見られた。また、卒業後の生活を見据え、地域施設の利用や、地域資源を活用した授業づくりを行ったことで、生徒自身も卒業後に生かしていける知識・技能を身に付けることができた。

このように、どの学部でも児童生徒の発達段階に応じて授業の中に様々なしかけを取り入れたことで、児童生徒の学ぶ意欲の向上や次の学習に学んだことをつなごうとする姿が見られるようになった。

#### **（４）教師の関わり方の変容**

教師も、児童生徒が学びをつなぐためにはどうしたらいいのかを念頭に置いた授業づくりを行った。学びをつなぐための教師の支援等の工夫については以下のとおりである。

##### **<小学部>**

子ども理解シートを活用して事例対象児の実態把握を行い、目指す姿を焦点化して教員たちが共通理解して指導に当たることができた。また、教員が他の児童へも定着できるような指導・支援をより意識して取り組むことができるようになった。

##### **<中学部>**

職業・家庭科の教科としてのねらいを踏まえ、生徒一人一人の学びをつないでいくことを意識して関わるようになった。また、作業学習や生活単元学習で扱う内容と日常生活で扱う内容とを関連付けることを意識して授業を組み立てるように努めた。

「未来へのスケッチ」の記入については、日々の学校生活や家庭生活と結び付けていくことの重要性について生徒に気付かせるように、授業で学んだことを掲示したり、振り返る機会を設定したりして支援を行うようになった。

##### **<高等部>**

高等部では、生徒が自己理解を深めることや、必要感を感じることができる題材の設定に努めた。また、生徒個々に応じた主体的な進路選択や体験活動の設定、自分の取組を相手に伝える機会の設定を行うなど、学びの定着から日常生活や卒業後の生活にどのように生かしていくかを考えた指導・支援をするようになった。

また、「未来へのスケッチ」の活用方法を工夫しながら、定期的な評価や、生徒同士での共有、外部評価や即時評価に当たった。さらに、教室掲示や帰りの会で振り返り、作業担当教員間の共通理解のツールとしても活用をするようになった。

#### **（５）児童生徒の学びをつなぐために**

本研究で得られた成果について「児童生徒の学びをつなぐ」観点からまとめると次のようなことが挙げられる。

##### **○児童生徒の思いや願いを反映される授業づくり**

児童生徒自身が学びたい、やってみたい、○○したいという願いや要望等を教師が認め、受け止めて授業づくりに反映させることが重要である。そのためには未来へのスケッチを活用した年間指導計画を作成し授業づくりを進めることが大切である。

##### **○児童生徒による評価**

児童生徒自身が目標をもち学校生活や家庭生活を過ごし、定期的に振り返りや自己評価や他者評価ができるような仕組みについて、児童生徒の実態に応じて改善していく必要がある。

##### **○現行の教育課程の見直し**

授業デザインミーティングで得られた成果や、保護者のニーズや要望等をもとに、学部間の「学びの連続性」やキャリア教育の視点も考慮した教育課程の見直しが必要である。そのためにも、「未来へのスケッチ」を効果的に活用して学校と寄宿舎及び家庭との連携を図り、児童生徒が学びをつないだ姿を共有したり、授業づくりに生かしたりしていきたい。

<参考文献>

- ・秋田県立ゆり支援学校 研究紀要「研究ゆり」第24号（2023）
- ・秋田県立ゆり支援学校 研究紀要「研究ゆり」第23号（2022）
- ・秋田大学教育文化学部附属特別支援学校「本人主体の個別の教育支援計画(私の応援計画)を活用した教育課程の編成」研究紀要第44・45集（2018・2019）
- ・「豊かな自己理解を育むキャリア教育」（2014）小島道生 片岡美華
- ・「知的障害教育における学びをつなぐキャリアデザインー本人の思いや願いを踏まえた深い学びの実現に向けてー」（2021）菊地一文
- ・「キャリア・パスポート」に関するQ&Aについて 初等中等教育局児童生徒課（2022）
- ・「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）」 文部科学省（2017）
- ・「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」文部科学省（2017）
- ・「特別支援学校学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）」文部科学省（2017）
- ・「特別支援学校幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領」文部科学省（2017）
- ・「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(最終まとめ)」文部科学省（2018）



## 秋田県立ゆり支援学校 研究の歩み

※平成27年度まで「秋田県立ゆり養護学校」、平成28年度より「秋田県立ゆり支援学校」となる。

号	年度	研究主題
1	平成11年度	「地域に支えられ、地域に開かれた学校を目指して」～新設校への理解を求めて～
2	平成12年度	「地域に支えられ、地域に開かれた学校を目指して」～新設校への理解を求めて～
3	平成13年度	「一人一人が生き生きと取り組む授業づくりを目指して」～授業づくりに結びつく個別の指導計画の作成を通して～
4	平成14年度	「一人一人が生き生きと取り組む授業づくりを目指して」～授業づくりに結びつく個別の指導計画の作成を通して～
5	平成15年度	「一人一人が生き生きと取り組む授業づくりを目指して」
6	平成16年度	「集団の中で一人一人が生きる授業づくりを目指して」
7	平成17年度	平成17・18年度 秋田県教育委員会委嘱特殊教育実践研究協力校 「障害の多様化に応じた教育課程の在り方に関する実践研究」～一人一人の教育的ニーズに応じた支援の充実を目指して～ ☆校内研究～「集団の中で一人一人が生きる授業づくりを目指して」
8	平成18年度	平成17・18年度 秋田県教育委員会委嘱特殊教育実践研究協力校 「障害の多様化に応じた教育課程の在り方に関する実践研究」～一人一人の教育的ニーズに応じた支援の充実を目指して～
9	平成19年度	平成19・20年度 秋田県教育委員会委嘱特別支援教育実践研究協力校 「障害の多様化に応じた特別支援学校の在り方に関する実践研究」～一人一人のニーズに応じた生き方指導の在り方を探って～
10	平成20年度	平成19・20年度 秋田県教育委員会委嘱特別支援教育実践研究協力校 「障害の多様化に応じた特別支援学校の在り方に関する実践研究」～一人一人のニーズに応じた生き方指導の在り方を探って～

号	年度	研究主題
11	平成21年度	「集団の中で一人一人がのびる授業づくり」～目指す姿を明確にした目標設定と支援の在り方～
12	平成22年度	☆本校 「豊かな生活を送るために～活動する喜びや働く喜びが実感できる授業を目指して～」 ☆道川分教室「一人一人が周囲とかかわる力を伸ばすための支援の在り方」
13	平成23年度	☆本校 平成23・24年度 新学習指導要領に基づいた教育課程の編成等に関する実践研究協力校 「豊かな生活を送るために」～活動する喜びや働く喜びが実感できる授業を目指して～ ☆道川分教室 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業の創造を求めて」～児童生徒の主観に迫る確かな実態把握とは～
14	平成24年度	☆本校 平成23・24年度 新学習指導要領に基づいた教育課程の編成等に関する実践研究協力校 「豊かな生活を送るために」～活動する喜びや働く喜びが実感できる授業を目指して～ ☆道川分教室 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業の創造を求めて」～自発的に活動する姿を育む状況作りとは～
15	平成25年度	☆本校 平成25年度文部科学省委託 特別支援教育に関する実践研究充実事業研究推進校 「自ら考え、自ら活動する児童生徒の育成」～生徒指導の観点を生かした授業づくりと研修の充実を目指して～ ☆道川分教室 「集団の中で個が生きる授業づくりを目指して」～分かりやすい状況を作る4つの観点を生かして～
16	平成26年度	☆本校 平成25年度文部科学省委託 特別支援教育に関する実践研究充実事業研究推進校 「自ら考え、自ら活動する児童生徒の育成」～生徒指導の観点を大切にした授業づくりと教育課程の改善を通して～ ☆道川分教室 「コミュニケーションの深まりを目指した授業づくり」～個々のニーズにあった教材・教具の工夫、改善を通して～
17	平成27年度	☆本校 「人と関わる力を高める授業づくり～自分の気持ちや考えを自ら伝える姿を目指して～」 ☆道川分教室「コミュニケーションの深まりを目指した授業づくり～4つの観点を大切にした支援の在り方～」
18	平成28年度	☆本校 「児童生徒一人一人の人と関わる力を高めるために～気持ちや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり～」 ☆道川分教室 「人との関わりを広げる授業づくり～自分の気持ちを表し、伝える姿を目指して～」
19	平成29年度	☆本校 「児童生徒一人一人の人と関わる力を高めるために～気持ちや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり～」 ☆道川分教室 「人との関わりを広げる授業づくり～自分の気持ちを表し、伝える姿を目指して～」
20	平成30年度	☆本校 「主体的に人と関わる力を高めるために～校内資源や地域資源を活用した授業づくりを通して～」 ☆道川分教室 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくり～自立活動における個別学習の指導を通して～」
21	令和元年度	☆本校 「主体的に人と関わる力を高めるために」 ☆道川分教室 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくり～自立活動における個別学習の指導を通して～」
22	令和2年度	☆本校 「児童生徒による学習評価の充実～各教科の授業づくりを通して～」 ☆道川分教室 「児童生徒による学習評価の充実～自立活動の授業づくりを通して～」
23	令和3年度	☆本校 「児童生徒による学習評価の充実～児童生徒が学びを実感し、学びをつなげる授業づくりを通して～」 ☆道川分教室 「児童生徒による学習評価の充実～自立活動の授業づくりを通して～」
24	令和4年度	「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成

## 令和5年度 研究同人

校長 近藤 千晴  
教頭 阿部 裕子 時田 航

### 〈小学部〉

畠山 千恵	長谷川絵美子	長谷山孝志	下村 志穂	今野 瑞恵
佐々木弘美	伊藤 和美	熊地ゆうき	軽部 亜紀	津田 徹男
横田 千春	佐藤 瑞枝	高橋 健太	鷹島 薫	藤澤 知里
高野 哲	作左部美帆	廣田 舞花	横山 友香	菊地 瞳子
板垣里佳子	佐藤美奈子	佐藤 由生	矢野 隼人	

### 〈中学部〉

菊地 正紀	高橋 直子	桐田明日子	石垣 幸子	東谷いずみ
高橋真理子	大川 周悦	加藤 智美	粟津 綾乃	江川 悠介
斎藤 明	首藤 将大	大滝 陽平	山田瀬里奈	大門真理子
小坂 雄介	川村 沙織	土田 奈緒	佐々木あゆみ	

### 〈高等部〉

加藤 俊和	大庭せい子	塚田 誠	堀井 千秋	板垣 五月
斎藤 仁	佐々木 顕	伊藤 昌子	伊藤 尚子	籠山 誠
渡辺美樹子	工藤 思郎	田中 正之	佐藤 江美	塚本 竹美
吉田 卓也	富田 昌裕	永井 淑子	鈴木 梨沙	安藤 真貴
工藤裕美子	小池成生子	松橋 智恵	小番 奈々	田中佑可子
佐藤 美白	石井 真	長谷川善行	藤原実乃里	

### 〈寄宿舍〉

佐藤菜穂子	佐々木なおみ	富樫 裕子	小澤美和子	朝香由美子
金釜 未幸	川尻恵美子	谷口 大介	杉田 真子	西嶋 一就
鹿子澤 奨	工藤 美香	佐々木 恵	佐藤 弘康	

**秋田県立ゆり支援学校研究紀要「研究ゆり」第25号**

**印刷・発行 令和6年3月**

**発行 秋田県立ゆり支援学校**

**〒015-0885 秋田県由利本荘市水林456-3**

**TEL 0184-27-2630**

**FAX 0184-22-8706**

**本校HP**

